
零夜の奇妙な転生

ブラックファントム・ゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零夜の奇妙な転生

【Nコード】

N4021Z

【作者名】

ブラックファントム・ゼロ

【あらすじ】

VRMMO中に小猫をかばってトラックに挽かれて死亡した平凡な少年、閻堂零夜あんどつれいやは剣と魔法の異世界『ザッハトルテ』に転生する。最強の最強転生者による、異世界転生のバイブルがとうとう開幕!!!

この作品は、人によっては読んで不快になるような内容、表現を多分に含んでいます。ジャンルをご確認の上、納得してからお読み下さい。また、この作品は元々『天啓的異世界転生譚』の作中作であり、ブラックファントム・ゼロは架空の作家です。

重要

作中の誤字・おかしい文章は演出です。毎回頭を

ひねって誤変換しています。

登場キャラクター紹介（前書き）

本作のジヨバンニ出てきた人物の紹介です。
魅力的なキャラクターの数々をお楽しみください。

登場キャラクター紹介

『あんどつれいや闇堂零夜』

本作の主人公であり、ブラックファントム・ゼロ作者の分身。

テンプレな転生イヴェントを減て、剣と魔法の世界『ザツハトルテ』に転生する。

能力地だけを見れば少ししか最強ではないが、その扱い方が尋常ではないため最強の上の最強くらいに最強になっているのだった。

性格はいつもなら温厚だが、逆らう奴には容赦はしない。人格的にも素晴らしく、温厚だが奴隷や悪徳商人や腐った貴族を許してはおかない正義漢の持ち主。

本当の実力なら既にSSSS級（超特SSS級。超上級魔神レベル）をも凌駕する力を持っているが、あまり目立ちたくないのでEE級（超最弱。弱すぎて逆に目立ちまくるレベル）の冒険者というこ
とで世をしのぶ仮の姿である。

また、これは秘密の設定なので言うことはできないが、実は今回以外にも九回の転生を経験し、『神殺し殺し』などの異名を持つが、その記憶は『ナイン・テイル九の世界を支配するモノ』によって封印されている。しかも、彼はまだ二回の転生を残している。

『リスティーナ・スメラギ・ティーアリーエ・ナイティンゲイル』

実は某国の王様の一粒種で、第一王女であるが、夜みんなが眠くて

油断している間にさらわれて奴隷にされてしまった。

読者の間では、「実は姉妹がいる」とか、「血は繋がっていないが姉的存在ならいた」というデマゴギーが流行っているが、かなりの事実無根である。

前述した事情によつて、悪徳奴隷商人につかまっていたが、零夜に助けられてからは零夜に一生ついていく決意を固めた。

清純な性格と兼ね備えられた容姿を持っているが、時々嫉妬深い一面を見せることも・・・!?

その有能でどこにでもついていく正確からか、ファンの間では『ノーパソ王女』なんて呼ばれているらしい。

その名前のセンスはどうかと思うが、沢山の人に気に入られてもらつて何よりです。

アリガトー!!

『ヘルマーン・ンジャーメイナ・タルマーン・イルマーン』

零夜の生涯のライバルで、凡人の想像を絶するほど邪悪な魔法使い。奴隷商人のふりをして悪事に勤しんでいた所を零夜に邪魔をされ、それから零夜を変質的に恨み、狙うようになる。

ちなみに名前の構成要素が似通っているように見えるのはよくいわれるごろ合わせのために無理やりとかではなく、彼の故郷では同じ発音を繰り返すことで魔術を強化できるというおどろおどろしい迷信のせいなのでまったく無理やりではない。

『エイファシア・ルクストール・ファラウェイ』

どう見ても二十一歳にしか見えないが、実は町名なエルフのため、実は1万二千歳。

一般人に身をやつしていたが、零夜の素晴らしすぎる人格に挽かれて彼の仲間になることを決意する。

得意魔術は闇精霊を使役した超光魔法。

魔法に秀でたエルフの仲でも闇精霊を使って光魔法を使えるのは彼女だけで、エルフからは全面的に非常に尊敬されているが、エルフの仲でもくずなやつらにはつまらない嫉妬の所為で憎まれている。その魔法の腕は超一級品だが、本人は超一級品であることを隠している。

『暗黒の宰相ジャアーンクール』

普段はいい人ぶって笑いながら近付いてくるのでいい人だと思われがちだが、その中身は実に腹黒い。

零夜も最初は騙されそうになるが、零夜は頭がいいので初めから全く騙されなかった。

自分のことしか考えておらず、いつおすごく悪たくみなことが、エツチなことばかり考えている。

好物は焼きビーフンだが、最近カレーにもはまっている。

『ダークネスオブシャドウドラゴン』

最強の暗黒流。

凡人であればその姿を見ただけでショック死してただちに絶命する程度の強さ。

ゲーム世界では零夜意外のすべての存在を須らく恐怖に痺れさせる恐ろしい敵だったが、その敵はさらに恐ろしい力を備えて転生世界で零夜を待ち構えていた。

とある事情から零夜はこの暗黒龍と戦うことになるが、その凄まじい暗黒の闇ブレスに苦戦を強いられる。

戦闘に勝利してからは零夜に隷属する忠実な使い魔になった。

『オールキルマギヤム 惨殺の白猫將軍』

いつも顔も隠す全身鎧をミニ着けているため、性別すら謎で、彼女が男なのか女なのかすら、まだ謎に包まれている。

全ての生き物を残虐に殺す残虐さから全ての生き物に嫌悪されているが、実は猫には優しいので猫になつかれる。

全身鎧の胸元がふくらんでいることから、巨乳美女が相撲取りなのではないかとまことしやかに噂されているが、彼女が兜を脱ぐ瞬間まで誰にも彼女が美女だとは想像もできないだろう。

読者の人も、彼女の正体が明かされた時は驚くことはうけおいである。

恐ろしそうな外見に見えるが、実は・・・？

転生1・宇宙最強の最強転生者！

SIDE 零夜

おれ、闇堂零夜あんどうれいよは今日もVRMMO『ナイトキング・オブ・ワールド』をやっていた。

「チツッ！！雑魚どもが！！」

おれは自分のキャラ『ゼロ』を操作して身のほごしらずにもおれにPKを挑んできたプレイヤーたちをけちらした。

PKしてきたプレイヤーたちのレベル150。これはかなりのレベルの高さだ。

『ナイトキング・オブ・ワールド』は指数関数的にレベルアップの大変さが代わるため、レベル0から50まで上げるより、50から100。100から150まで上げる方がずっと大変だ。それは大体100倍くらい大変だといわれている。

8

悪漢プレイヤーたちはわざと初心者ダンジョンの近くを歩いていたらおれを見つけると、

「へへッこいつレベル1じゃねえかやつちまえ！！」

「武器全部とあり金おいていけばたすけてやるぜヒヤッハー！！」いきなり襲ってきて問答無用だったが、それはおれの思うつぼだった。

なんと、おれのキャラはキャラレベルが最高の200にならないとできない転生をもう10回もやっているのだ。

転生1回で能力値が500レベル分くらい上がるので、レベル1でもおれの能力値は5000レベル相当ということになる。

それでもおれの職業が太陽戦士でなければ逃げられたかもしれない。だが、太陽戦士なので到底無理だ。

おれが太陽戦士なれたのは、ほんの偶然だった。

なんでも後で聞いた話によると、太陽戦士になるには下級職である戦士を最高レベルの200まで上げた後、一日のうちにランダムでほんの一秒の百分の一の間だけある太陽が黒くなる瞬間に太陽を見た人だけが太陽の戦士へのクラスチェンジ資格が与えられるらしい。

そもそもおれのほかに戦士なんて下級職をレベル200まで上げたやつはおれ意外にいなかったし、あとから太陽戦士のクラスチェンジ条件を知った奴がおれの真似をしようと戦士をレベル上げたがぜんぜんダメだったらしい。

それはやっぱりおれが偶然経験値が10倍になる指輪と戦士でも装備できるSSSランクの剣を手に入れていたことが大きい。

この二つが偶然手に入ってなかったらおれだって戦士をレベル200まで上げることはとても無理だったので本当におれは幸運だった。

それに、太陽の情報も幸運だった。

太陽戦士というくらいだから太陽を見るとクラスチェンジできるんじゃないかとひそかに思っていた（これを思いついたのはやっぱりおれだけだったらしい）おれは、フィールドを歩いている時でも戦闘中でも三秒に一回くらい太陽を見上げるようにしていた。

おかげで視点移動のコツがわかったのも思わぬ収穫だ。

やっぱりいくらキャラクターが強くても、プレイヤースキルが低いとどうにもならない。その点おれはプレイヤースキルも高かったので視角はない。

特にこの『ナイトキング オブ ワールド』（正式名称は『ni

ghtking of world』はさすがに『騎士王の世界』
というだけあって、ほかのステータスさえ高ければ勝てるVRMMOと違って、特に剣とかの駆け引きが大事になるため、プレイヤースキルがないとレベル100のキャラでもあつさりレベル1のキャラに負けたりする。

まあおれレベルになるとそんなことはなくなにもしなくても負けないが、おれはプレイヤースキルをみがいているので、たまにおれを偶然と運のおかげで太陽戦士になれただけの雑魚だと思う奴はおれの剣さばきを見てこしを抜かしていたこともある。

そんな色々な幸運とみがきつづけた実力のおかげで太陽戦士に転職できるとなったときはおれも手が震えた。

そして、ソラウルという太陽戦士転職用の隠れNPCを見つけて、実際に転職してみて、まるで太陽のような黄金の装備、まるで太陽のように光り輝く自分の姿をみて驚いた。だがもつと驚いたのは太陽戦士になったあと、雑魚と戦ってみておれはまた驚いた。

なんと太陽戦士レベル1は戦士の上級職である騎士のさらに上級職である聖騎士のレベル200より強かった。

しかもオリジナル技『太陽の華』サン・フラワーはその場にいる全員に一斉に攻撃する上に普通の技の2倍以上の攻撃力を持っていたので、PKしたやつらは一瞬だった。

「うそだろなんでレベル1でこんな・・・」

「あ・・・ありえない・・・」

「うわああああ・・・化け物だーーーーーーー」

死ぬ時の光るエフェクトをのこして悪党プレイヤーは死んだ。

本来なら絶体絶命の状況を生き抜いたのにべつに達成感はない。

「つまらないな・・・」

むしる胸にぽっかり穴があいたような虚無感があるだけだった。

悪党どもが死んでアイテムを落とす。

さすがに150までレベル上げしているやつらだからそれなりの装備をたくさん装備していたのでそれを落としていた。

それは普通のプレイヤーだったらひとつ取っただけで興奮して夜眠れなくなるほどのすごいものだったのだが、

「つまらないな・・・。」

おれはそんな物には興味がなかった。

おれの持っている装備は全部SSSランク。しかもSSSの中でもさらに一番貴重だといわれるアイテムばかりだ。それを知り合いの鍛冶屋に頼んでSSS級の魔法石で強化している。

普通SSS級の鍛冶はなかなかうまくいかないのだが、おれの場合は幸運にも30回連続でうまくいった。

知り合いの鍛冶屋もこんなことは生まれて初めてだすごいといっていた。

だから、ほかのやつらならともかくおれはいまさらレベル150のアイテムを手に入れてもゴミとしか思えなかった。

しかたないのでその高価なアイテムを特に身もせず全部のアイテムをインベントリにしまうと、街にもどって店に行った。

「全部換金で」

そういつたら隣でアイテムを見ていた女戦士が、

「えっ!!これすごいレアアイテムよ!!売り物じゃなかったらわたしは欲しいくらいよ!!」

「じゃああげるよ。」

「えっそんな悪いわ!!よく知りもしないのに。」

「でもおれは本当にいらないんだ。ほら。」

ちよっと迷ったがおれは自分の装備欄を見せた。

「すっすごい！！全部SSS級アイテムじゃない！！しかもこの聖真龍王の剣つてもしかして、あのイベントで一本だけしか出て来ないっていわれているあの・・・！？」

女戦士が騒ぎ出してまわりがざわざわとしはじめた。

これはまずい。

「ごめん。おれ太陽戦士だからめだちたくないんだ。」

「えっ！？太陽戦士ってあの伝説の職業でいままでに一人しか出来たことがないっていわれているあの・・・！？」

「とにかくそういうことだからあげるよ。」

おれはすぐに装備欄をとじるとお姉さんにアイテムをわたした。

お姉さんはもっとおれの装備をじっくり見たかったようだがおれはあまりめだつのは好きじゃない。

不満そうなお姉さんと別れておれは外に出てログアウトした。

「つまらないな・・・。」

現実の退屈さを忘れるためにやったはずの『ナイトキング・オブ・ワールド』だったのに、あまりに強くなりすぎて張り合いがない。

トッププレイヤーが六人がかりで行って一発もダメージを与えられなかったという最強のあん黒龍『ダークネスオブシャドウドラゴン』ともソロで戦ったが、こっちが一発軽く攻撃しただけで死んでしまった。

本当は喜ぶところだが、最強といってもこんなものかとおれはぎやくにがっかりしてしまった。

かといって違うキャラを作って最初からやったり別のゲームをするのも気が乗らない。

おれがゲーム機の前でボツとしてると、

「な、なんだ！！？」

とんでもないことがあった。

突然おれの家の壁やぶってトラックが突っ込んできたのだ。

おれは持ち前の反射神経であわてて逃げようとするが頭に『ナイトキング・オブ・ワールド』用の装置をつけていたせいで動きがにぶった。

だがおれの反射神経のレベルならそれだけならなんとか逃げられた。

だが、目の前には飼った猫の子猫がいた。

このままではおれだけなら逃げられても子猫だけなら死んでしまおう。

おれは考えるより先に子猫をかばってしまっていた。

「うわあw j f wヴあw jふいじゃ；；！！」

途中から自分でもなにをいつているのかわからなくなってしまった。

それぐらい痛かった。

(ああ。おれは死ぬのか……。)

おかしいことだがくやしきはなかった。

むしろそれよりおれは子猫を助けられたことに満足しながら、おれは闇の中に落ちていった。

気が付くと雲の上にいた。
どうやら天国のようだ。

「チキシヨウツ！！ VRMMO中に子猫をかばってトラックにはねられて死亡なんてなんてテンプレだよ！！」

おれはくやしさをおさえきれずに怒鳴った。

おれだってそういう物語を読んだことはあるが、自分がまさかそんな悲愴な運命に巻き込まれるとは思ってもしなかった。

テンプレなんていって悪かったなと昔の小説の主人公たちにおれは謝った。

するといきなりひげの爺さんがあらわれた。

「すまなかつたのう。お前が死んだのはわしのミスなんじゃ。」
爺さんはいった。

「ちょっと隣にいた死ぬ予定のやつがいたのじゃが、ちょっと死ぬファイルの操作をミスつての。かわりにお前を殺してしまったのじゃ。てへw」

てへwじゃない！！

おれは爺さん、いやクソ爺に怒りがこみあげてくるのを感じたが、冷静に冷静に、と自分の怒りをおさええた。

「じゃあおれが死ぬのは予定外だったってことですか？」

「そうじゃな。むしろお前は200歳近くまで生きて寿命で死ぬ予定じゃったらしいがわしがミスつたせいで死んだ。」

「えっそれじゃああなたは誰なんですか？」

おれは本当はわかつていたがたしかめるために聴いた。

「ふふふ！！わしは神じゃ！！人間の命の管理もわしがやっておる

「!!」

クソ爺、いや、クソ神様が胸をはっていった。
その時おれはわかってしまった。

神というのは人よりもずっと強い力を持っている。だから人の痛みがわからないのだと。

おれはいつも弱い者にもやさしい気持ちを持つように自分で気をつけているが、こいつは自分の力に頼るばかりで弱い奴の気持ちを考えようともしない。

「なんじゃ？反抗的な態度じゃのう？お前を地獄に落としてやってもいいんじゃないぞ？」

クソ神様が気分が悪くなるようなネコナデ声でいった。

普通の人間だったらここで土下座でもして鳴いて誤る場面だっただろう。

だがおれはそんなことはできなかった。

「神様なんていつてもこんなものか・・・。

つまらないな・・・。」

口からつい、正直な気持ちが出てしまった。

「なんじゃと！？いまお前はなんといった！？」

(しまった・・・。)

おれは自分が闊達うかつだったと悟った。

クソ神様は怒り狂った。

「ちょっとは見どころがあると思ったが所詮は人間か!!わしのよ
うに力を持たない下等な生き物にはわしのすばらしさはわからない
なそうだ人間など全部滅ぼしてやろうか!!」

「なんだとっ!!」

おれはクソ神様の目を見た本気だった。

(こいつ本気だ・・・!?)

おれは恐ろしくなった。こいつは本気だった。
本気で単なるひまつぶしで人間を全て滅ぼそうとしているとなぜ
かおれにはわかった。

「まずはお前をアツ!!」

クソ神様はまずおれを倒そうとしたが、それは遅すぎた。

そのときおれは目に見えないほど速く、いくなれば疾風や台風よ
りも早く動き、クソ神様の二の腕の関節を決めて動けなくしていた。

「なっなんだと・・・!?!」

「思ったとおりだな・・・。」

クソ神様は必至でおれの腕から抜け出そうとするが、そんなこと
はできない。

いくら神だとかいってもちよつと不思議な力が使えて世界を創つ
たり壊したりとかできるだけで、しょせんは戦いの素人。

本物の戦場において敵を数千人以上殺して黒い死神と呼ばれたおれ
のスピードにはついてこれなかった。

「な、なにがおこつたんじゃ・・・。」

お、お前!! お前はただものではないな!! いったい何者じゃ!
「!!」

「なんだそんなことか。つまらないな・・・。」

おれはちよつと昔傭兵をやっていただけの、ただのどこにでもい
る平凡な少年だよ。」

おれはそういって二の腕の関節に力をこめた。

「う、うわああああ!! やめてくれ!! いや、やめてくださ・・・
やめてください!!」

クソ神様はすぐに根をあげて悲鳴をあげた。

おれは拷問術にもすぐれているので普通の100倍の痛みがある
はずだった。

「もうおれにひどいことしないか？」

「はっはいしましえん！！」

「約束をやぶったらひどいぞ！？」

「ぜっぜったいやぶりましええん！！」

クソ神様が泣き叫んだ。ここまでやれば大丈夫だろう。

さっきまでえらそうな態度をとっていたクソ神様が泣き叫ぶのを見ておれはすっとした。

「じゃあすぐおれをもとの世界にもどせ」

「そっそれはムリでしゅ！！」

「なんだと！？」

おれはおもいきりクソ神様のひげを引っ張った。

力を入れすぎたせいか、神の頭が地面にめりこむ。

ざまあみるだ！！

「本当のことをいえ！！うそをつくと承知しないぞ！！」

おれはさらにクソ神様の頭をふみつけにする。

神様の頭をふみつけにできるなんて、おれくらいの実力者くらいしかないだろうにちがいない。

「む、ムリなものはムリなんでしゅ！！一度死んだ魂をもとの世界にもどすと因果の流れが狂っておそろしいことが起こるでしゅ！！最悪時空が崩壊して世界が大変なことになるでしゅ！！」

「じゃあおとなしくおれに死んでろっていつのか？」

「ほかの世界なら大丈夫でしゅ！！もちろん零夜さまなら記憶とか姿とかをそのままでマンガの主人公みたいなたーと能力をたくさんつけてゲームの世界に送ることだってできるでしゅ！！」

「ゲームの世界に……。」

クソ神様のやつは気に食わなかったが、ゲームの世界に行けると

というのは魅力的だった。

ただ、だまされていたりする可能性もあるのでもう一回だけ確認する。

「つまりおまえは下手すれば世界を滅ぼしかねないレベルのチート能力をわたしたり好きなゲームの世界に送れるほど全能なのに、因果の流れとかなんか事情があるからおれをもとの世界に生き返らせることはできないってわけだな!？」

「はっはいそうなんでしゅ!! だからこそさないで!!」

「チツ!!」

こんなやつ殺す価値もない。

おれは神のひげをぶちぶちちぎってから、神を開放してやった。

「ありがとうございますましゅ!! ありがとうございますましゅ!!」

ゴミがなにかをいっていたが、聞く価値もない。

本当はこんな無能な神なんて殺した方が世界のためかもしれないと思ったが、いくらおれだって死んでから生き返る術すべなんて知らない。おれのためになるから生かしてやったただけだ。

「しょうがないな。異世界に行つてやる。」

「ほ、ほんとでしゅか!？」

「ああ。そのかわり、色々選ばせてもらつぞ。」

「も、もちろんでしゅ!!」

さて、ではどうするか。

これからの一笑にかかわる問題だから、慎重に考えなければいけない。

「よし決めたぞ!!」

まず、当然行くのは『ナイトキング・オブ・ワールド』の世界、
『ザッハトルテ』だ。

剣と魔法の世界『ザッハトルテ』。おれの新しい世界にふさわしい勇壮な名前だ。

「それと、能力についてだが・・・そうだな。

まずおれが使ってたデータのキャラの能力をおれにコピーしろ。

あと、この状態から年をとらないようにして、二つの職業を同時につけられるようにして、経験値を100倍に、成長限界も外せ」

「そっそれだけでいいんでしゅか!？」

条件をいっただけ驚かれた。

どうやらおれはほかの転生者に比べてずいぶん良心的だったらしい。

「ほ、ほかのチート転生の人たちはひどいでしゅ!!!

マンガの能力全部とかバ〇スっていったら魔王城が壊れて魔王が死ぬようにしろとかそもそも神様の力を全部よこせとかチートすぎでしゅ!!!」

「それはひどいなww」

おれはおもわず失笑がもれた。正直理解ができない。そんなに強くなつてどうするつもりなんだろうか。

「おれは成長する余地がのこっている方が好きなんだ。

簡単にどんなやつでも倒せたらつまらないからな。」

簡単に手に入るものに価値なんてない。

最初はよくても、すぐに力を悪用して悪の道に走ってしまったたり、強過ぎる力を使いこなせずに破滅してしまうのがオチだ。

おれはそれをよくしっていたためそういう失敗はしなかった。

「さっさすがでしゅ!!!ただ強いだけじゃないでしゅ!!!」

クソ神様がおれを尊敬の目で見ていた。

男にそんな目で見られてもちつともうれしくない。

「さっさと転生しろよ!!!」

「はいでしゅー!!」

最初とは全く正反対になった立場におれは笑いながら、おれは転生した。

「ここはどこだ・・・。」

転生をすると、おれは見知らぬ場所にいた。

自分の格好を見てみると、漆黒の鎧に漆黒の小手、どうやら無事にゼロの装備をひきつぐことができていたようだった。

「しかし街がどこにあるかもわからないしどうしようか」

おれが突然の異世界のことにとまどっているとき、

「キヤーーーーー!!!!!!!!!!」

どこかから女性の悲鳴が聞こえた。

「あつあれは・・・!?!」

悲鳴が聞こえた方を見ると、逃げているみすばらしい身なりの女の子ふたりを馬車に乗った太った男たちが追いかけていた。

ここで素人ならすぐに助けにいくところだが、もし女の子たちが悪の手先だったらおれは悪者になってしまう。

「このやろう!!お前みたいな奴隷が、この貴族で奴隷商人のオレ様から逃げ出すなんて100年早いんだよ!!」

そこで豚みたいなのバカ貴族が大声を出してくれたおかげで、すぐに事情を理解することができた。

助けに入ろうと決めたところで、豚貴族が腕を振り上げた。

「あつまずい!!!」

おれはそう思ったが、どうしようもなかった。

豚貴族はもう武器を振り上げ始めているし、馬車との距離はまだ30メートル以上ある。

ゲームキャラのゼロとなったおれの身体能力なら光速を越えて移動することもできるが、いまのは完全に間に合わないタイミングだった。

バサツ！という音がして女の子のひとりが倒れる。

距離があつたのでよく見えなかったが、視力が5・0のおれの目には見ただけで即死だとはっきり見えた。

「おねえちゃん、いやーーーーーー！！！」

もうひとりの女の子が悲鳴をあげた。

「くそっ！！！」

おれは危険もかえりみずに飛び出すと、女の子の前に立った。

「お前たちはいったいなにをしているんだ!？」

突然でてきたおれに、当然豚貴族たちは驚いた。

すぐに豚貴族が勝手な言い分をまきちらす。

「こいつらは奴隷なんだよ！！おれは貴族でそいつらの持ち主なんだよ！！！」

「ちつちがいますこいつらは無理矢理わたしたちを街からさらって・

・・！！！」

「うるせえ黙れ！！！」

「きやあっ！！！」

また豚貴族が女の子を剣の腹でなぐる。

おれが女の子の前に立っているのにその目の前で馬車の上からそんなに長くない剣の腹で女の子をなぐるなんて……。

位置関係を見殺した豚貴族の最低な行為に、おれの怒りはもう有頂天だった。

「とにかくやめろっ!!」

おれは豚貴族の剣をつかんだ。

「なんだお前さからうのか!? おれの父親は伯爵だぞ!!」

みえみえな脅しだった。

だがそんなみえみえの脅しに屈するおれではない。

けれどこんなやつでも先に手を出したらおれが悪いことになってしまっ。

おれは耐えた。

戦っただけで問題を解決するのは一流のやることだからだ。

「とにかく事情を聞かせてください。二人の事情をくもりなき眼まなこで見定めて正しいほうに味方します」

「えっ?」

奴隷の女の子が驚いて声をあげた。

まるで荒野に咲く一輪の花のようにかわいらしい声だった。

「相手が貴族だというのに奴隷の言葉を聞いてくれるだなんて・・・

」

なにかぶつぶついつているがよく聞こえなかった。

おれの悪口じゃないといいんだが。

いや、この子はそんなことをする子じゃないな。

おれはすぐに反省した。

「そんなことしたとか! おいこいつもやつちまえ!!」

無視されて怒った貴族が命令した。

馬車のうしろからごつい男たちが何人も何人もでてくる。

「キヤー!!! にげてえっ!!!」

女の子が叫んでいるがおれはにやりとふてぶてしく笑った。

「いいんですか?・・・ぼくに手を出したら・・・死にます

よ。」

おれは剣に手をかけながらそう忠告したが、

「かまわん！！いけー！！」

男たちはかかってくる。

しかも、男のひとりが鑑定スキルを持っていたのか、さげんだ。

「ギャハハハ！！こいつレベル1だぜ超雑魚だ！！」

「そんなんっ！？にげてえっ！！」

女の子が全部の希望をなくして悲しそうなのに叫ぶ。

自分の身があぶないのにおれの心配をしてくれるなんてなんて純

真無垢な人なんだ。おれはすごく感動して助けよう思った。

「なんだおまえ最低レベルじゃねえかおどかしやがって！！」

少しびびっていたほかのやつらもおれにかかってくる、女の子が

目をつぶる。

しかし、

「バツバカな……。」

男たちの攻撃は、おれにかすり傷ひとつ負わせることができなかつ

た。

男たちの武器はおれの体の表面で止まっている。

あまりの防御力のちがいに攻撃がまったくきかないのだ。

「これでも最低レベルですが（笑）」

そういつて、おれは攻撃してきた男の剣を指一本でつまんで折つてみせた。

それを見た男たちは、

「うそだろなんでレベル1でこんな……。」

「あ……ありえない……。」

「うわああああ……化け物だ……」

「……！！！」

といて逃げようとするが、それはおれが厳密にゆるさない。

「おかえしです!!!くらえ!!!」

おれが闇よりも濃い漆黒の剣を振るうと、

「ぎゃーーーーー!!!」

「いていてえよ母ちゃんーーーーー!!!」

「ゆるしてくれなんでもするゆるしてくれーーーーー!!!」

「!!!」

男たちは数秒の長い悲鳴をあげながら一瞬で全滅した。

おれは用兵時代に数千人も殺して死神と呼ばれたが人を殺したの
は始めてだった。

だがこんなやつらは死んで当然だった。

だからふつうだったら人を殺したら罪悪感とかが大変だが特にな
にもかんじない。

「あ、あわわわ……。」

あとにのこった豚貴族は馬車の上で失禁していた。

「きつ貴族にさからうのかそんなことしたら……。」

「そうですね。おれはべつに手を出さなんていつてないのに一方的
に手を出してそっちがやられるとか笑えますねw」

「しっしまった……。」

豚貴族は顔を蒼白にした。

自分から手を出していないのだからおれは正当防衛だ。

そのことに気付いて豚貴族は顔を蒼白にしたのだ。

「まっさて!お、おれはえらいんだぞ?!おれの父親は貴族で……
ひいっ!!!」

おれが剣を突きつけると豚貴族が豚みたいに鳴いた。

「それはべつにお前がえらいわけじゃなくて父親がえらいだけだろ
?かんちがいしてるんじゃないですか?それにおれはお前の父親の
権力なんてこわくないですしww」

そのまま剣を突き出すと、

「ぶひい！！」

豚貴族は気絶した。

「当たってないぜ。ただのみねうちなのに気絶するとかバカみたいだなwww」

おれは剣を寸止めしていた。

ふつうの剣士なら簡単ではなく難しいが、おれくらいのレベルなら簡単にできることだ。

小便をちびつたまま気絶した豚貴族を放置して、おれは少女のほうに向かう。

「大丈夫かい？」

そうしておれはやさしい笑みで自分が助けた奴隷の少女のところに歩いて行った。

無理矢理奴隷にされて奴隷商人にひどい目にあわされてほんの数分前に目の前で姉を殺されたばかりの少女に、返り血を浴びた黒づくめのおれが歩いて行ったらきつと怯えさせてしまつと素人なら思うだろう。

だが、おれの持つ雰囲気を読み取ったのか、少女はすなおにうなずいた。

(か、かわいい・・・！！)

よくみるとみすばらしいかつこうをしていたが、少女はどこかの国の王女だといっても信じられるくらいかわいかった。

そのせいで、おれはよく妹にしていたみたいに頭をなでてしまった。

「あつ・・・。」

「わっ悪い。いやだったか？」

こわがらせてしまったかと思つてそう聞いたが、少女は首をマシ

ンガンみたいにぶんぶんと振った。

「お、王子様みたい・・・ポツ／＼」

少女は小さな声でなにかいったが、おれにはよく聞こえなかった。
「なにかいったか？」

「い、いいえ、なんにも・・・。」

これが裏切りと破壊と凌辱りやうじやくと血と臍物しやくぶつと畏怖おそおそと憐憫れんきんと侮蔑おごりと嘲笑あざわら
と尊敬そんけいと凌辱りやうじやくと非日常ひにちじょうにまみれた地獄じごくのような世界での最初さいしょの
い。

おれと、のちのおれの最初の妻となるリスティーナ姫との最初
であいだった。

転生2・王を超越する者

SIDE 零夜

チュンチュン。

あさ、すずめの泣き声で目を冷ましたおれは、

「お早う。リステイナーナ。」

隣ではだかで寝ていたリステイナーナをそつと口付けをして起こした。

「アツアン。おはようございますレイヤさま。」

いきなり農耕なキスを躲されて、リステイナーナはびっくり仰天して体を起こしたが、じぶんが全裸だったことを思い出して、はずかしそうに体をかくした。

おれははじらうリステイナーナを見て、タベあれだけのことをしたのに、まだはじらうなんてはじらいが残っていてかわいいとおれは思った。

あれからおれたちは気絶した奴隷商人を起して脅して蕎麦にいた奴隷の少女、リステイナーナの所有権を脅し取り、最寄りの町に行くことにした。

えっ 奴隷商人？ もちろん放置ですよ。

身ぐるみ剥いで置いてきたから、今頃魔物のエサじゃないですかね
wwww

最寄りの町についたおれたちとはにかく疲れていたの宿を取る名案をおれの提案でもいついた。

おれはリステイナーナにも一部屋をとってあげようとおもったのだ

が、
「ど、奴隷がひとり部屋をとるなんてとんでもないですッ!!」
といわれたのでおなじ部屋を宿にとった。

しかしすごく美人なりステイーナといっしよの部屋にいたらいく
ら針山のうえで寝る人よりガマン強いといわれたおれだつてガマン
できない。

だが結論からいうとおれはガマンする必要なんてまったくなかつ
た男と女がおなじ部屋に宿をとったわけだからステイーナも覚悟
はあったのだ。

「れ、レイヤさまになら・・・／＼／＼」
といったのでおれは全然ガマンせずにステイーナを抱いた。

ステイーナは当然処女だったが、おれは当然童貞などではなく、
百戦錬磨でともうまかつたので、

「アッアン、こんなのはじめて・・・。」
といってステイーナはあえぎまくった。

それからステイーナを何百回も絶頂させ、寝むつたのはほんの
ついさつきだった。

「そうだ。ステイーナ。これを着るんだ。」

ステイーナのまえの服はもうすりきれてボロボロだったしほと
んどの場所がボロボロだったので、きのうの夜ぬがせたときにぜん
ぶ捨ててしまったのだ。

だから変わりにおれはゲーム時代にもっていたアイテムからメイ
ド服とりだしてステイーナにわたした。

「えっこんないい服を?!」

おれがわたすとステイーナ驚いた。

ステイーナの話では、ふつうこの世界では奴隷にあまりいい服

はふつうわたさないらしい。

しかしおれはそんなことは気にしない。奴隷だっておなじ人間なのだ。

それなのにひどい服を着せる人間の気がしれないしそんな人間はくずだ。やっぱりこの世界の人間たちはくずばかりだとおもった。

しかし、おれがもっているのはメイド服。つまりメインのスカートがやたらミニなエプロンドレスに、装飾肩なホワイトプリムとオーバーニーハイソックスはあるが、下着のたぐいはもっていない。

ゲームでは中世設定ながら下着とかもちゃんとあったが、漫画とかではよく女性用下着売り場に男の主人公がいつしよにいたりするがあれは男としてどうかと思うのでおれはそんなものはみとめなかった。

「わるいな。これはイヴェントの報酬でぐうぜん手に入れたただけだから下着はないんだが……。」

おれがもうしわけなくなっていくと、リステイナは首をきつスキのようにはげしく横に降った。

「そっそんな……。こんなに立派な服をいただいたのに、下着まで貰ってしまつてはわたしがこまっちゃいます!!」

「そっそうか。そういつてくれると助かるが……。」
どうすればいいかおれは悩んだが下着はあげないことにした。

ここで空気の読めないやつならもうしわけなく思つて下着を用意してしまうかもしれないが、そんなのは緒戦自己満足にすぎない。

自分のもうしわけなさをなくすために相手に物をあげるなんて本当のやさしさではない。

相手がこまるといふのならあげないのが本当のやさしさなのだ。

それがわからないから日本人の悪いところだが、幸いおれは国という目線を超越していたので涙をのんで下着をわたさないことも造作

もないことだった。

「じゃっじゃあちよつとこれを着てみますね。」

そういつてリスティーナが着替えると、おれは目をうたがった。

部屋に天使が光輪したのだ！！

いや、天使なんて生ぬるい。もはやリスティーナの美しさは天使なんて美辞麗句では表現不可能な形而下の事象に過ぎないと言っても過言ではないだろう。

メイド服を来たリスティーナは、まるで美の女神、この世すべての美と美貌を寄せ集めた純真無垢な天使そのものだった。

「どっとうですか？」

「すごいにあつてるぜ。まるで美の天使みたいだ。」

「そつそんな！ほめすぎですよっ！！」

リスティーナはてるるが本当だからしかたない。

メイド服を来たリスティーナのかわいさはそこのアイドルグループなんて相手にならないほどだった。ここが日本だったらすぐにテレビのトップアイドルにかけあがれるに違いないのかわいさだった。

だがおれのリスティーナをテレビごしでも世の男どもが穢けがれれた視線で見るのは不愉快だ。やっぱりここが日本じゃなくてよかったとおもっておれだった。

しかもリスティーナが来ているメイド服。ふつうのメイド服のよくな見た目にしか見えないが、じつはものすごい防御力と能力修正地をほこり、火と水属性への強い体勢があるだけでなく、水属性吸収効果と火属性無効科の効果までついているSS級の装備である。

これをつけていればリスティーナがたとえまた悪漢たちにおそわれても安心だろう。

おれも愛用の漆黒装備に着替えてふたりで下におりると、

「ゆうべはおたのしみでしたねww」

と宿屋の主人にいわれたのでむかついたので反射的にぶんなくっておいた。

「はっはずかしいです!!」

リスティーナはてれていたが、ゆうべは

「アツアン、キモチイイ!! たまんない・・・!」

「そっそんな・・・かつ堪忍してー!!」

「らっらめー!! とんじゃうー!!」

とハデに叶んでいたの、バレてもしかたないかもしれない。

だがリスティーナにはずかしい思いをさせたのはたしかなので、宿屋の主人はもう一発ぶんなくってからげたいにしゃべらないように口止めして、金貨一枚をにぎらせておいた。

「えっこっこれは金貨?こっこれいただいてもいいんですか・・・?」

「どうせはした金だからな。おまえにやるよ。ただしその変わりだれにもいわないでくださいよ」

本当はなくっておしまいでいいのだが、それだといつがなくられたとか軍隊にチクるかもしれない。

軍隊相手でも負けるきはしないが、そんなことになったらリスティーナがこまってしまうだろう。

度量の広いおれは、金をわたしてこの話を解決する頭脳はの解決策を採用したのだ。

どうせゲーム時代の金貨がインベントリの中に10000枚以上入っている。

1枚くらいは惜しくはない。

しかし、この世界の物価なら、あの金貨一枚で一般的な家族が一年間遊んでくらすだけの金貨だろう。それをもらった宿屋の主人はいきなり土下座を始めた。

「あつありがとうございます！ありがとうございます！」

「ちよつちよつとやめてくれよ。はやく顔をあげてください」

こんな風に土下座をされたらおれがまるで悪者みたいだからおれはすぐに顔をあげさせた。

なぜ主人はこんな奇妙な行動をしたのか。くわしく事情を聞いた。

「じつは……。」

なんと話によるとこの宿屋の娘が病気になってしまって、高い治療費をはらわなくちゃいけないのに高すぎて払えなかったのでこまっていたそうなのだ。

ゆうべはおたのしみでしたねとかいうから余裕かと思っていたが、人生いろいろあるらしい。

もしかすると娘を救えない憤りが主人をゆうべはおたのしみでしたねに走らせたのかも知れない。

そう考えると主人にも校正の余地はある。

「ふうんだつたらこれではらえばいいじゃないか。」

「ははあー。ありがとうござますうう！！」

おれが金貨を押しやると、主人はそれこそ神様に向かって礼をするみたいな丁寧さな仕草で金貨を受け取った。

……こいつ、おれが神様ふみつけにしたって訊いたらおどろくかな？

そんなことをちよつと思つたがそれで今よりもつと尊敬されたりしてもウザいだけだからやめた。

土下座の店主に見送られ、おれたちは今度こそ宿のそとにでる。

「やっぱりいいことをした後は気持ちいいな。」

「はっはい！・・・やっぱりレイヤ様はやさしいかたです（ボソッ。

」

「えっなにかいった？」

「いついえなんでもありません！！」

やっぱり何かいっていた気もするが、べつにいいか。

「うーんどうすればいいかまったく検討もつかない」

宿屋を出たのはいいが、これからどうすればいいのだろうか。

まったく検討もつかなかった。

「あっそうだ！なら冒険者ギルドにいけばいいんじゃないでしょうか？」

するとリステイーナがナイスなアイデアを出してくれた。

「そうか冒険者ギルドか・・・。」

おれも『ナイトキング・オブ・ワールド』では冒険者ギルドにはお世話になった。いや、むしろお世話していたといっても過言ではないほどの活躍ぶりを見せた。

世界でも12人しかないSSSS級冒険者、『アーサーテーブルズ・トゥエンティ・ナイト』の一員呼ばれ（しかも自分で名乗ったわけではなくて自然とだれかが言い出した）、まともなプレイヤーからの尊敬と、くずプレイヤーからの嫉妬を受けていたのだ。まあそういうのはどぶの腐ったにおいがするからすぐわかって瞬殺だった。

「よしじゃあ行くか」

「はいっレイヤ様っ!!」
そしてギルドに付いたので、おれたちはためらいもせず扉を入った。

周り中から不躰な視線が集まってくる。
たしかにリスティーナはかわいいからしょうがないとは思っがほんとうにウザい。

今すぐ呼吸を止めてくれないだろうか。

しかしおれが少しオーラを出すとそいつらは静まった。
戦うものは自分より強い人間を本能的に悟って戦わないというのは有名な話だ。野生動物くらいの知性はあるようだった。

おれは周りからの畏怖と恐怖と憐憫の視線を受けて悠々と歩き出して受付にいった。

「うわっ!?!」

受付にいたのはすごい美人で胸の大きいエルフだった。

おれは人を外見で判断したりすることはまずないが、その胸の大きさにはちよつとびっくりしてしまったGカップはあるだろうか。

日本ではまずお目にかかったことないレベルの巨乳だ。

リスティーナが歌って踊れるスーパーアイドルだとしたら、このエルフの受付は超グラマーなグラビアアイドルだろうか。どちらにせよすごい美人だ。

「何か御用でしょうか？」

そういった声もすばらしく、とてもきれいな声だった。

「きれいだ・・・。」

だから思わずいつていた。

「えっ・・・？」

受付の人驚いて声をあげた。

「いついやなんでもないんだそれより依頼を見せてくれ。Sランクでいい。」

「えっSランクですって!?!」
受付はお驚いていた。

なんだ?べつにへんなことはゆっていいないが。

「カードを見てもよろしいですか?」

「あつああ。べつに問題はないが・・・。」

おれがカードをわたすとギルド員は、

「まつまさかつ?!?いいえ、これは・・・!!」
と驚いたあと、

「あつこれ偽造じゃないのっ!!」
とんでもない濡れ衣をいい出した。

「なにをいつてるんだ偽造なんかじゃないぞ!?!」

「もしや神様なにかトチツたかあのくずめとおもったが違ったらしい。」

「いいえこれは偽造です!だって今はラングドシャ歴234年なのにこれは98年ってなってるわ偽造じゃなきゃおかしいもの!!」
なぜかカードの年代がずれたらしい。

「そういえばクソ神様に転生のとき、この世界とはいったが年代はいわなかったのが裏目に出たので正しく時代を選ばなかったのかも
しれない。」

「やっぱりあのクソ神様次有った時ぶつ殺すとか物騒なことを考えていると、ギルド員が騒ぎ出した。」

「カードの偽造は重要な犯罪よ!最低でも30年は牢屋につながれて豚のような生活をするから覚悟しなさいよね!」

「ちがうっ!!濡れ衣だ!!」

「言いわけは牢屋の中で30年ずつとすることね！ガード！ガード！」
ギルド員が軍隊を呼ぶ。
このままだとまずい。

「くそつこうなったらしかたない。女に暴力をふるったりはしないが……。」

おれはしかたがないので力ずくでも説得することにした。

「ガード！ガー、むぐつ！」

金髪ギルド員の口をふさいで黙らせ、そのまま髪をつかんで、おくの部屋にひっぱっていく。

おれにつかまえられたギルド員がさげぶ。

「なつなにするつもり！？ あたしはギルド員なのよっ！？ そのあたしにこんなことしてただですむと……アツなにするのやめてッ……！」

たしかに冒険者ギルドには王国に匹敵する程の力があるとされているから、そんなギルド員に暴力を振るつたなんて噂がたつたら大変なことになるだろう。

だがおれはそういう権力に任せて人を脅す最低行為が許せないタイプの人間だったので逆効果だ。

「うるさいッ……！さつきからおれはなにも悪いことをしてない善良な市民をつかまえて勝手なことばかりいいやがって……！お前みたいに傲慢で他人を思いやることができないうつは、一度しっかり躰けてやった方がいいんだよ……！」

ギルド員は最初は威勢がよかったが、おれの迫力にようやく核の違いを悟ったのか、ふるえあがった。

「ひっひい……！やめてさっきのはウソよじょうだんなの……！」

「いまさらそんなことが通用するなら警察はいらないだよ!」
「アツアア! そんな・・・!?」
そして、おれはこんどこそおくの部屋にギルド員をつれこみ、

「アツアン、キモチイイ!! たまんない・・・!」
「そっそんな・・・かつ堪忍してー!!」
「らっらめー!! とんじやうー!!」

「もう生意気なこといわないな」
「アツアン、こんなのはじめて・・・。」
「おい訊いているのか!？」
「はっはいごめんなさい!! もうご主人様には逆らいません!!」
五分後、ひみつの『教育』をしてもどつてくるとそのエルフの受
付嬢はすなおになっていた。

まあちよつとやりすぎておれのことをご主人様と呼ぶようになってしまったがしかたないだろう。
そのときなんとなく隣のリスティーナの目が詰めたかった気がするが、気のせいだろう。

「あつあのもうしわけありませんご主人様! この冒険者カードは五年以上更新されてないからもう無効になってるんです!」
「なんだとっ!」

「ひっひい! ごっごめんなさい! わたしが命をかけてギルドマスタ

「を説得してカード更新させますからゆるしてっ！ゆるしてください
いおねがいますう!!」

おれはギルド員の（名前はエイファシアというらしいと聞いた）あ
われな懇願を訊いて、怒りをしずめた。

あまいとは思ったが、エイファシアだって今は精一杯やっている
し、何より美人に涙はにあわない。

「いいよ。」

「えっ!?!」

「ギルドランクは最低のEE-でかまわないから新しいカードを作
ってくれ。」

「えっでもっそんなっご主人様っ!」

エイファシスはびっくりしたがそれは実はもっともなことだった。

ランクはEE-からSSSSSSSSSS+までであるが、上にな
ればなるほどランクを上げるのは困難かつむずかしくなっていく。

それがSSラ
ンクにランクアップするのは不可能ではないかといわれる由縁^{ゆえん}である。

SS
が、AからSになるのの100倍、いや、100倍の100倍くら
いはむずかしいのではないかと考えられている。

その為なら家族も友人も愛する祖父母だって裏切るやつらがくず
だがいるだろう。

そのくらのランクをおれは無言でどぶに捨てようというのだから
これはびっくりしないほうが驚くくらいの驚くべき出来事だったと
いえる。

「最初からはじめるのもご主人様の實力なら試験を受ければSラ
ンクからのスタートだって夢ではないのにそれなのに最弱のEE-

ランクでいいんですか!？」

「ああ。めだちたくないからな」

おれはただでさえ太陽戦士ってゆうすごいクラスで目立つしリスティーナもかわいいから目立つ。

しかしおれはあんまり目立つのは好きじゃないのでそれは逆効果なのだ。

「EE - ランクなんて、子供でもならないスライムの一滴より弱いとされるランクですよ。こんなランクになったらきつといるんな人に馬鹿にされてしまいます。それなのにご主人様はそんな苦難の道を進むというんですか？」

「いや、いいんだ。それでやってくれ。」

最強から最弱への転落。上等じゃないか。

運命がおれをそうさせるなら、それにおれは抗ってみせる!!

「・・・わかりました。ご主人様がそうおっしゃるなら。」

エイファシスはそのときおれの覚悟をしつかり理解した様子だった。

すごく真剣な様子でおれに新しいカードを作ってわたす。

「あの、一応できましたけど、でも・・・。」

「いいんだっていったる? まあその変わりすぐランク上げたいから、ランクSの依頼とかをおれに優先してまわしてくれよな?」

「はっはい! もちろんです!」

やっぱり美人の笑顔はいい。その笑顔をおれが守ったとなればなおさらだ。

ふたりで笑いあっていると、急に横から殺気が感じた。

「イツマデ、フタリデ、ワライアツテルンデスカ？」

あ、あれ？なんでだろう？

隣にいるのはリステイーナのはずなのに、すさまじく汗が止まらない。

「サツサト、ヨウジ、スマセマシヨウネ？」

「はっはい！！」

おれたちはそろってすぐに返事をした。

・・・それにしてもしステイーナさん、ちょっとキャラ変わってきてませんか？

「あっそういえば、ここらで悪徳商人のヘルマーンが指名手配されているのって知っていますか？」

「悪徳商人ヘルマール？」

「非道なことばかりする悪の商人です。でも、ものすごく強いAランクの取り巻きたちがいるから誰も手出しできないんです！」

「ふーん。世の中いろいろいるなやつがいるもんだな。」

しかしリステイーナの様子がおかしかった。真冬の野外でもないのにぶるぶる震えている。

「れ、レイヤ様。それって、わたしをつかまえた奴隷商人ですつ。」

「な、なんだとっ！！あのおれがぶったおしたやつらか！！」

おれは驚いたが、それ以上にエイファシアが驚いた。

「えっご主人様あいつらをやっつけたんですかっ！？」

「あっああ、そうだが・・・。」

あんな雑魚どもがAランクなんて嘘だろう。

全然歯ごたえなかったし。

まあおれが強すぎたという可能性もあるが。

「だっだったらついてきてください!!」

だがエイファシアは興奮するとおれのうでを取った。

それを見てリステイナーがむううとハリセンボンのようにふくれる。

おれも腕にすごい胸が当たるのでそれどころじゃなかった。

「どっどこにいくんだ?」

「王城です!!」

「えっええーっ!!うそーっ!!」

というわけで、いきなり王城につれてこられた。

何でも指名手配した理由は王様だから、倒したやつは王様に謁見できるらしい。

はつきりいつて有難迷惑での何物もなかったが、エイファシスのためにもすっぱかすと面倒だ。

エイファシアはツンデレぎみだがかわいいし、王城に行く前に宿によってあの大きな胸で楽しませてもらったりしたしなwww

「おつきなお城ですね。わたしお城って始めて入りました。」

まるでどこかの国のお姫様という隠し設定がありそうなりステイナーだが、王城に入ったりするのは始めてのようだ。初々しい感じが花蓮でいじらしかった。

だがおれは権力で相手を変えるなんてことはしない。

歩き方も実に堂々としたものだ。

腰がたたたなくなつたエイファシアの変わりの案内の人もひどく感心していた。

謁見の間にいつておれはまっさきにいつた。

「ふうん。あんたが王様か？」

周りから、

「なっ無礼なっ！」

「即刻獄門打ち首にしてやるぞっ！」

という声が聞こえたが無視する。

どうやらその程度の人間しかいないようだ。

「つまらないな・・・。」

そうおれは思ったからさっさと話終わらせようとした。

「あの商人の取り巻きを殺したのはおれだ。あと商人本人はその場に置き去りにしたぜ。じゃあもう用は済んだな行くぞ。」

そういつて謁見の間に退出しようとおもつたおれに声かけられた。

「きつ貴様、この歴史あるベニエ王国の重鎮たちを前にして無礼千万であるぞ！」

おまけにそんな薄汚い奴隷を連れて貴様は生きる価値もない奴隷と似たような存在だ!!」

それを訊いたおれは足を止めた。

「なん・・・だと・・・!？」

だれがいつたのかはわからなかつたが、

「よくいつた宰相サマ！」

「さすが宰相サマすばらしい！」

と聞いたやつらからすると今いったのは宰相なんだろう。
見ると、やたら不細工な肥こえがとった男がそこにいた。
こいつが宰相だろう。

「今の言葉、すぐに取り消せ！」

おれは最大限の迫力をこめていった。

「なんだとっ？」

「リステイーナはおれの大事な仲間だ！そんな仲間を薄汚い奴隷だ
と聞いたお前のくずな言葉を取り消せっていったんだよ耳が遠くな
つちやいましたかねー？」

最大限の侮蔑を込めていう。

「なんだとっ！そいつが薄汚い豚同然の最悪の奴隷という身分の女
だというのは事実だろっ！帝政なんてするかっ！」

「・・・そうか。」

それを訊いてやっぱりおれは確信した。

身分だとか地位だとかは関係ない。やっぱりこの宰相はやっぱり
くずなのだ。

くずほど身分だとか外見だとかばかりを気にして、まったく中身
を見ようともしない！！

「なあ。おまえに聞くが・・・。」

おれは底知れない核熱のマグマのような低い声でいった。

「オマエは、こいつみたいに肌がきれいなのか？」

「な、なにをいつている？」

そんなはずないのはわかっている。

宰相はひどい不細工で、肌だつてぶつぶつだらけだ。

「オマエは、こいつみたいにつややかな髪をもっているのか？」

「きつ貴様・・・。」

絶句する宰相。

それはそうだ。宰相の髪は不潔な油でぎとぎとしていた。

「オマエは、こいつみたいに宇宙コスモを映したみたいに神秘的な瞳を持っているのか？」

「う、うぐぐ……。」

宰相はとうとううめき声ひとついえずに黙り込んだ。

それはそうだろう。宰相の目は、豚のくずみみたいなひどくにごった魚の目をしていた。

おれはとうとう抑え込んでいた怒りを爆発させた。

「お前らはこいつを奴隷だ薄汚いと罵ったが、この中でこいつよりも美人でかわいくて花蓮で美しいやつがいるっていうのか！こいつは奴隷だから劣っているんじゃない！外面だけを見て内面を見れないお前らのほうが本当は劣っているんだ！！」

おれの裂ぱくの叫びが響き渡り、

「れ、レイヤ様……／＼」

うしろでリステイーナがほほをそめた。

「く、うう。おぼえているよっ！！」

悔しさが限界突破したのか、宰相は恥も外聞もなく逃げ帰った。

あとに残された重心たちはだれもが戸惑うだけで何もできなかった。

「やれやれ。国のトップたちがこんな様子じゃこの国も終わりだな・

……。」

そうやっておれが颯爽と帰ろうとしたとき、

「待たれよ！客人！」

一番の上座。天にまします玉座から、王が声をあげた。

この謁見の間に着てから始めて王様の声を聞いた。以外とナイスミドルな声で洪かった。だが、それとこれとは話がべつだ。

「待つ義理なんてない。本当はここであんたらを皆殺しにしてもいいんだぜ？」

それはただの脅しだったが、その場にいたみんなは本気だと勘違いしたのかみんな震えた。

だが王様だけは違った。

震えずに冷静になって支持を出した。

「あれを持ってこい！」

「しかしあれは・・・！」

「くどいぞ！わしが持ってこいといったらすぐさま持ってくるのだ！」

それで運ばれてきたのは・・・。

「あつあれはこの国に代々伝わる焼土下座という最大限の謝罪の意を示すときに王族が使う焼鉄板！おやめください陛下！そんなことをすれば、陛下の前髪と額は・・・！」

「控える！客人に友誼をみせるためならば、私の前髪と額などやさしいものだ！！！」

そういつて王様は熱されて湯気をあげる鉄板にむかって、土下座のポーズを始めた。

「本気なのか・・・？」

さすがのおれも、これには息をのんだ。

見ているだけで、あの鉄板の暑さははっきりとわかった。

あんなものに頭をこすりつけながら謝ったらただでは済まないだろう。

だが国王は、自分の所為じゃないのに自分の部下がやった不始末だからと鉄板に土下座して謝ろうとしているのだ。

並みの人間だったら絶対にこわくてできないことだった。

「馬鹿な宰相に変わってわしが謝罪する。本当にすまなかった。」
そういって、王様はゆっくりと頭をさげる。

そして、その額が焼鉄板につきそうになった瞬間、

「アツ・・・！」

細い力が強く盛況さを感じる手が、その頭を止めた。

その手のもちぬし、それはもちろん、

「れ、レイヤ殿・・・。」

おれだった。

おれは国王が本当に焼土下座してしまうという瞬間に、秘儀テレポートワープを駆使して王様のもとに殺到、その顔を上げさせて窮地を防いだのだ。

「顔をあげなよおっさん。なんというか、感動しました。あんた漢オトコだよ」

い この、単なるEE・ランクの冒険者と、ベニエ王国国王の巡り合出逢

い。

これが世界を変える一瞬の分岐点だったとは、神すらもまだ想像すらもしてもいなかったのだった。

転生3・vs最強のあん黒龍との対決!! その1

《SIDE 零夜》

焼土下座の阻止。

おれは常人ならほとんど無理なことだが、おれにはたやすいことだった。

王様は危機一発をとめてくれて、おれを感謝のまなざしで見た。

「あつありがとうきみは心優しい若者じゃ!」

「やめてくれっ!おれは尊敬できる漢を助けるといふ自分の目的のためにやっただけなんだっ!」

おれは人格的にはどちらからという温厚の部類に入るが、自分のこだわりのためにやったことなのにいい人みたいにいわれることが多かったので気に食わない。

「あたいまえのことをしただけなんだ。そんな感謝されてもしようがない。」

これだけははつきりいっておかなくては。

しかしそうやっていったのに逆効果な時もある。

「しかもすごく検拳で偉いとは・・・。この世界にもまだこんな若者がいたか。」

「だからやめてください。おれ目立つのは嫌いなんで・・・。」

そうおれはいったが王様はやめなかった。それにそれをみたほかの人々も次々におれを硝酸し、ほめたたえた。

こんな全然大したことない当たり前のことでほめられるのはちょっと複雑な気分だ。

この世界にはそんなこともできないくずが多いのだろうか。

「とにかくあんたは本当の嘆ほんまのおんだとおもつ。にげていった宰相はくずだが……。」

おれは本心からいったのに王様慌てた。

「いついや大臣だつてあれはすごくいいところがあるしとても有能なのだ！だからすぐに許してやれ！」

「なんだって!?!」

どうしてこんな焼土下座する勇氣ある人があんなくずの大臣をかばうのだろうか。

「なんならもつかい焼土下座をしてもよい！むしろ王様にいい気味だからさせてくれ！だからわし・・じゃなかった宰相をゆるしてほしい！」

今なにか驚とかいってなかったか？この世界には猛禽類いるんだろっか？

そんなとりとめもないことを考えながら、おれはしかたなくうなづいた。

「今回だけ特別ですからね」

「やつやつた！感謝するぞグへへへへ。」

「グへへへへ？」

「いっいやなんでもない。感謝するのじゃ！」

そのときおれは鋭い第六巻で異常を関知したが、あんまり無礼だと失礼だとおもわれるとおもって、いわなかった。

「そつそれよりおれはあんたが気に入った。何かひとつだけならお手伝いしますよ？」

すると王様はびっくりして思わず口をすべらしてしまったみたいだった。

「なんとっそれはしめたことじゃ！見たところこの坊主の力は協

力無比！！王様を魔法具であやつって傀儡人形かいらいじんぎょうにしたてあげた絵画
あつたわい！！」

「えっいまなにかいつたか？」

「いっいやっ！なにもいつておらんぞ！とっとかくくれぐれも宰相を悪くいつてはならんぞ！」

「まっいいけど」

おれはすぐにあきらめた。

実はこの言葉はおれの考えがあつての言葉だ。

おれは前の世界では強すぎて退廃な人生を送っていた。

けれどこの世界なら強い敵がいるはずだ。

たとえばあの・・・『ダークネスオブシャドウドラゴン』のよう
な・・・。

まあそんなに強いのはいないだろうが、この王様に困ったことがあるならそこに強いやつがいる確立は高い。

すると王様はいった。

「じつは、おぬしには『ダークネスオブシャドウドラゴン』を退見
してほしい。」

なんてこつた・・・。

『ダークネスオブシャドウドラゴン』。

おれの宿命のライバル同士は、ここでも立ちぶさがるのか・・・
！？

それから王様はこの国の苦しい実情を語ってくれた。

「じつはここから三日ほど町の右のほうのダンジョンに、『ダークネスオブシャドウドラゴン』は住んでいて領民たちを常に三日三晩苦しめている。わしらはなんども倒そうと頑張ったのじゃが並みの精鋭ではまるで歯が立たない。そこでレイヤ、おぬしの出番なのじゃ！」

「なるほどっ。なんの罪もない国民が、しいたけられて（なぜか変換できない）いるなら、おれがイカ猿を得ないなっ！」

世界で一番わるいことは、弱くて自分の力で自分の力で自分を守れないやつらをしいたけることだ。

そういう弱いやつを圧倒的な力の差で倒して喜んでいるようなやつがおれは大嫌いだった。

おれのように強さの果てに行ったものならだれだってわかってい

る。

本当に強いやつは心が強いだけであって、その強さは力ではない。

だからそれがわからない弱いやつを倒しておれが強いと思ってる弱いやつをおれが弱いやつを倒すおまえの方が弱いやつなのだと言

実を告げて、おれが圧倒的な力の差で倒してやることがおれの最高の喜びで生きがいだった。

おれは悪の手先を倒す喜びにもえていたが、そのとき、

宰相（グツヘツ）へばかめ。実は『ダークネスオブシャドウドラゴン』はなんにも悪いことはしていなく、わしらが勝手に財宝ねらいで責めていったのを返り討ちしてるだけじゃが坊主はそんなことするよしもない。もし坊主がにつくきあの『ダークネスオブシャドウドラゴン』

ン』を倒したらわしらが財宝は独り占めし放題じゃ！）
そんなことを大臣がおもっているとはするよしもなかった。

そこでいよいよ『ダークネスオブシャドウドラゴン』との因縁の対決がスタートしたが、おれはまず、女たちを説得しなくてはいけなかった。

「お前たちをつれてはいけない。いままでいつしよに色々な冒険をしてきたが、今回ばかりは危険なんだ。わかつてくれ。」

リステイーナもエイファシアもふたりともすごい美人でおれがいなければまっとうな人生を歩んでいけるかもしれない人材だ。

ここで無貌な戦いにいどむのは、あん黒龍という危険を犯すのはおれだけでいい。

そんな風におれはおもったのだ。

だが、おれがおもったよりふたりの決意は難かった。

「わたしはレイヤ様の奴隷ですっ！！なのに・・・なのにどんな危険な場所にもついていかねなければ奴隷とはいえませんかっ！！」

リステイーナが涙ながらにうったえる。

「もしひとりでイクというなら、まずわたしを殺してからイッてください！！」

「リステイーナ・・・」

こんなにおれのことをおもってくれたのか。

おれはただただリステイーナに勘当した。

「わかったよ。だが、ひとつだけ訂正してくれ。」

「え？」

「おれにとつてきみは奴隷なんかじゃない。美人で花蓮な、おれの最愛の奴隷だよ……。」

「れっレイヤさま……ノノノノ」

おれとリステイーナはどちらからともなく見つめあう。

その唇が、どちらからともなくちかづいて……。

「アッアン、キモチイイ！！ たまんない……！」

「そっそんな……かつ堪忍してー！！」

「らっらめー！！ とんじゃうー！！」

「アツアン、こんなにくせになっちゃう……。」「
満足してリステイナーを話したおれだが、まだエイファシアの説
得が残っていた。

「・・・またせたな。」「

「べつべつにつ！いま来たところよっ！」「

最初からずつといっしょの部屋にいたからバレバレなのだがそん
な健気なことをいうエイファシアにおれはかわいいとおもったが、
ぐつとガマンする。

奴隷だったリステイナーと違い、エイファシスはもともとこの国
でちゃんと居場所を持っていた人間だ。

おれにつきあつて無貌なチャレンジに望むべきじゃない。

「さつきもいつたが危険なんだ。お前はただの受付場にもどれ。」「

「イヤよっ！わたしはご主人様の愛にふれて世界を変えました。も
うあなたのいない生活になんて絶えられないっ！」「

「だがっ！」「

「それにつわたしは精霊魔法が使えますご主人様っ！ぜったいに足
手まといにはなりません！」「

「なにっ精霊魔法！？」「

精霊魔法は太陽戦死などの特殊な職業でなければエルフだけが仕
える特別な魔法だ。

その破壊力は絶大につきるといわれている。

「しかも使えるのは闇属性の超光魔法よ！」「

「なにっ！」「

あまり知られていないことだが、闇と光は表裏一体である。

闇があるところに光があり、光があるところに闇があるからだ。

しかし、その技術を体得するには凄まじい修業と、何よりすごい

才能が必要なはずだ。

「もし本当に闇の超光魔法が使えるなら、たしかに……。それを訊いて、エイファシスの目が光線的に光った。」

戦闘体制になったとおれにはきずいた。

「なら、ためしてみる？」

エイファシアの言葉に、おれも構えをとる。

「そうだな、いくぞっ!!」

おれはさけび、おれたちは全力でぶつかりあって……。

「アッアン、キモチイイ!! たまんない……!」

「そっそんな……かつ堪忍してー!!」

「らっらめー!! とんじゃうー!!」

「アツアン、こんなのくせになっちゃう・・・。」
おれはベッドに倒れるエイファシアを見てつぶやいた。
「たしかに、なかなかの強敵だった・・・。」
残念ながら精霊魔法を見るヒマはなかったがこれだけ凄ければ大
丈夫だろう。たぶん。

こうしてふたりともつれていくことになった。

三人で連れ立って町を出る。

守衛の男が美人ふたりと密着しながら歩いていくおれをすごく羨
ましそうに見ていたのが印象敵だった。

まっどんなに見てもふたりは身も心もおれのもんなんだけどね

WWW

「そういえば、エイファシアの強さはなんとなくわかったが、リス
ティーナは何ができるんだ？」

おれは洞窟に行く途中でそんなこと聞いた。

ふつうの人なら洞窟までの道は過酷で苦しいのでおしゃべりなん
てできないが、おれにはもちろん赤子に手をひねられるよりも造作
もないことだったのだ。

「はっはい。わたしはもともと王じょ・・・いっいえっ特殊な生まれ
だったので、ひとつりのことはできます。」

「ひとつりという？」

「はっはい。剣術棒術体術魔術針術精霊術変装術奇術柔術舞空術秘術美術手術に節約術、全てSランク相当の腕前です！」

「それは・・・すごいな。」

それが本当なら、リステイーナはどんな状況でもSランク以上のはたらきができるということだ。暗黒龍に通用するかはともかく、すくなくとも奴隷商人とかにつかまりそうになっても自力で倒せる程度には強いようだ。

それにしても、さつきリステイーナは『王じよ・・・』のあとなんていいかけたのだろうか。

いいかけたというかもうすでに全部いっちゃってる気もしたが、よくわからなかった。

「それで、逆に弱点とかはないのか？」

「じゃっ弱点ですか？その、いまはこのカツコウなので、その、風魔法とかが・・・。」

おれの質問にメイド服のスカートをおさえながら、真っ赤になつて応えるリステイーナ。

どうゆう意味か殺那の間だけ考えて、すぐに応えは出た。

「ああっそうか。リステイーナはいまノーパ：「レイヤ様のバカア
！」「」

台詞の途中でものすごい右ストレートがおれを襲った。

「い、いいパンチだったぜ・・・ガクッ。」

おれはそれだけいいのこして倒れた。

うん、リステイーナもこれだけ凄ければ大丈夫だろう。たぶん。

「そういえば、レイヤ様はまだレベル1なんですよね？」
「えっあんなにすごいのにレベル1なのっありえないっ！」
エイファシアはびっくり仰天したが、真実は残酷なのだ。

本当だよといおうと自分のステータスを見て、おれはあつと驚いた。

「あっなんだこれはっ！」

おれは自分のステータスを見てあつと驚いた。

おれはびっくり仰天したのだが、
「れっレベルがいつきに50になってるっ!!！」
どおいうことだ？

太陽戦士はものすごくレベルがあがりにくい辛い職業だから、ゲームでやってたときは悪徳プレイヤーを湯水のように倒してやっレベル2になるくらいだったのに……。

「あっそうか経験地100倍っ!!！」

おれは神様に願ったことを思い出した。

これはそのおかげの効果か。

たしかにAランクとかを一気に倒せば0.5レベルくらいは経験地が入るかもしれないからそれが百倍になった結果がこれなのだ。

「もし千倍っていったら一気に五百レベルか……。」
一気に成長限界を超える成長を遂げるところだった。
やっぱりチーとは危険だ。

そういうのがあると、すぐにチーとに頼りきる人間になってしま
う。

おれはこの前の自分の決断の正しさに感謝した。

「しかしレベル1じゃなくなったのはよかったな……。」

やはりレベル1だと雑魚やくずに侮られる人生は好きじゃない。

そうおれがにやにやしていると、だがそのときおれの耳には異常
な音声を感じた。

あーしまったなー。レベル1じゃなくなったからチンピラの
やられ台詞使い回しできなくなっちゃったなー。あたらしいやられ
台詞考えるのめんどいなー。

「なつなにものだっ！すがたをあらわせ！」

おれがさけぶと姿は洗わさなかったが、正体は見せた。

あ、見つかつちゃったか。こんちわー天の声です。

天の声？天の声……あっ！

オマエ天の声っていうかただの作者だろ！？

ダメだよーそういうのはーきずいてないふりしないとー。

うるせえ！！てゆーか馬鹿作者！

てめえのせいでおれはこんなわけのわからん星に飛ばされて苦勞
してるんだからな！！

いやーめんごめんじ。

謝る謝罪にぜんぜん誠意がかんじあねえ！！

そもそもいきなりヒロインキャラとか増やしちゃってちゃんと搔
き分けできるのかよ！！

まだ3話なのにヒロインふたりとなかよくなりすぎてすでにちよ

つと修羅場っぽい感じだぞ!?

それがちょっと困ってるんだよねー。でもヒロインはそれぞれ魅力的だから減らそうとはおもってないよ!むしろもっと増える予定ww

このダメ作者!くず作者!気取るんじゃないやねえよ英検四級落ちたくせに!!!

英検のことはいいっこなしだろ!おっおっと、つづき書かないきゃ……。じゃーねー!!!

二度とくんない!!

おれが天の声こと作者(たくさんの読者が待ってるのに更新スビードをあげないなまけモノ。まあでもそんな生獣だけいいところもあるよ?)をしっしとおいはらっている、エイファシアたちに変な顔をされた。

「どっとうかしたんですかっご主人様!？」
「そういえばふたりがいたのを忘れていた。」

おれはすっかり天に向かってひとりごとをいう変な人になっていった。

「なっなんでもないなんでもない。」
「おれは必至でごまかした。」

「なんでもないならいいですけども……。」「
エイファシスは不満そうだったがしぶしぶと同意した。

もうひとり、リステイーナは、
「レイヤ様?あんまりメタなことばかりいつてると読者がついてこられませんよ?」

「えっ?いまなんてっ?」

「いいえ、なんでも。行きましようレイヤ様。」
何事もなかったように歩き出すリステイーナ。

もしかするとリステイーナが一番恐ろしい存在なのではないだろうかとおれはおもった。

そんなこんなでダンジョンのおく。
そこに、やつはいた。

果てのないほどの暗さ、そして黒さ。
漆喰よりも暗い、そして昏い闇の獣が、いま、目覚めの刻を向かえようとしていた。

『ダークネスオブシャドウドラゴン』。

かつてある王国を死に至らしめ、今なお数多の伝説に語られる塔京の龍が、おれたちの目の前に立っていた。

「あっこれはっ!?!?」

「あつ足がうごかないっ!？」

おれのうしろでリステイナーとエイファシアが足をすくませていた。

しかし無理もない。

その信じられないほど大きくて巨大な巨体からは凡人であればその姿を見ただけでショック死してただちに絶命して命を落とす程度のオーラがにじみ出ていた。

さらに、悪いことは重なるものだ。

「すぐに・・・たちされ!」

それだけではなく、巨体から虚ろな声が聞こえる。

「おろかな・・・人間よ。いまならとくべつに・・・殺すのは勘弁して・・・やるぞ?」

ここでただの凡人かくずなら恐怖でしゃべることもできずに失禁しながら命乞いをして泣きさけんだらう。

だが、おれは・・・凡人なんかではなかった。

いや、そんなことはありえなかった!

「残念だったな・・・。おれは、おまえみたいに命を大切にしないやつがだいっきらいなんだよ!」

こうして、戦いの火豚が切って卸された!!!

転生3・vs最強のあん黒龍との対決!! その1(後書き)

長くなりすぎちゃったのでここでカット!!

次回は戦闘戦闘また戦闘のバトル会になる予感!!

つづきは……いい感想がいっぱいは行ったら書くかもね??

悪い乾燥は……ダメー!!

b y天の声こと”闇の中でこそ光る闇色の漆黒”ブラックファント

ム・ゼロ

転生4・vs最強のあん黒龍との対決!! 採集決選!! (前書き)

夢の中でメッシーにいわれました。

「もっとサイドを積極的に使っていけよ!!」
だから書きました。

航海はしていない!! W W W

b y ”天に輝く墮天の黒点” ブラックファントム・ゼロ

転生4・vs最強のあん黒龍との対決!! 採集決選!!

《SIDE 零夜》

「へッ!!この世界にきて始めて齒ごたえのあるやつに出逢ったぜ
!!ハッ!!」
おれは目の前のでっかい巨体にそう吐き捨てて剣をぬいた。

《OUTSIDE 零夜》

《SIDE 少女たち》

「あつあれはっ!!完成していたのっ!？」
その大剣を見たとき、わたしは転向した先の教室で通学路でぶつ
かった男子生徒を見つけたような大声で叫んでしまいました。
「えっ完成していたってどういうことなのっリステイナー!!」
エイファシアさんのの声にわたしはうなづきました。

「じつは昔、城の次女たちが話していたのをきいていたのをよく覚
えていました」

「よくおぼえていたのっ?」

「はい、よく覚えていました。」

「よくおぼえていたのね・・・。」

「はいっ。わたしは記憶術もSランクですので。」

「なるほどっ。それなら納得だわっ!!」

わたしはあの輝かしいばかりに輝いた剣を指刺しました。

「あの大剣は銘を『スーパードラゴニックドラゴンスレイヤーキラーソーディアン!』といいます。そしてその真名は、『ハンドレッツドビリオンレイピア』」

「えっじゃあまさか……。」

「はい。伝承にはあります。」

『龍射殺すは呪われし断罪の真剣なり!!そして百と億なりし竜を殺し尽くしたる刻、その封印は説かれ真実の姿が世界に著すだるう』と。

つまり、レイヤ様は、あの方は……。」

「百億の竜を殺したもの!!ドラゴンの点滴!!ドラゴンスレイヤーキラーなのです!!」

《《OUTSIDE少女たち》》

《《SIDE零夜》》

「悪いが、一撃で決めさせてもらっせ!?!」
おれはスキルを発動!

「ミスと
アポストロフイ幻惑の崩壊曲!?!」

一瞬のうちにあいてに距離を積めると、まずうしろにまわりこみ一撃、それから横に飛んでまた一撃、最後に逆側に回り込んでまた一撃した。

それが0・0003秒に起こったことだった。

「終わったな……。」

おれは勝利を核心していた。

いくらダークネスオブシャドウドラゴンが強くてもこれには絶えられない。

ダークネスオブシャドウドラゴンはゲーム中一体しか出て来ないモンスターで倒したらもう終わりなのでそもそもおれしか倒していかないのだが、ゲームのときもこの技で一撃で何度も倒した経験がある。

だが、それは甘かった。

「ギャオオオオーン!!」

やつはおれの技をくらってもまだまだ元気そうだった。

「おっおかしいこんなはずじゃ……はっ!!」

おれは大事なことをきずいてしまった。

ゲームではラングドシャ歴98年だったのに234年になってたことがあった。

それとゲームではモンスターも敵倒すとレベルアップするのだ。

つまり、このドラゴンはその間のだいたい120年くらいの間に成長をとげたのだ。

「クツソ、そんなの、反則じゃねえか!こんな強いのだして、負け

たら、どうしてくれるんだよ!!！」

この世界はなんてくそげーなんだ。

おれはクソ神様を呪ったが、しかしおれはあきらめなかった。

「ミスヒ アホストロフイ 幻惑の崩壊曲!!！」

もう一回やった。だが、それは無駄だった。

「なっなにっ!?!」

おれは驚く。ダークネスオブシャドウドラゴンが嗤^{わら}う。

「おれに・・・おなじ・・・わざは・・・痛痒・・・せんぞ!!！」

「なんてチートだっ!!！」

おれはくやしくなった。

おれはチートしてないのに、こんなチートな生き物が許されていいのか!!！」

「おまえの・・・わざは・・・すべて・・・見切った・・・。もう・

・・むだ・・・。」

「なっなんだとっ!?!」

「太陽戦史のわざ・・・くせ・・・ある・・・。おれさま・・・見切った・・・。」

「ばっばかなっ!!！」

おれはためしたが、やっぱり通じなかった。

もうダメなのか・・・?

おれはここで、GAMEOVARなのか!?!?

《《OUTSIDE 零夜》》

《SIDE少女たち》

ご主人様の攻撃が無駄になっていくのをわたしは無駄に見ている
しかなかった。

「わたしにはご主人様を無駄に見守るしかないのっ?」

そういうとわたしの手をリスティーナがぎってくれた。

「わたしも鑑定術をつかって弱点を探していますがまるでありませ
ん。でも、ひとつだけできることがあります。」

「なに・・・?」

「レイヤ様を信じて、祈ることです。」

わたしはハットした。

そうだ。

わたしがご主人様を信じてあげなくてどうするのだ。
わたしは識しっている。

ご主人様の力強さ。ご主人様のたくましさ。ご主人様の無人像の
体力。ご主人様の硬さ。ご主人様の熱あつ。そしてご主人様自身の・・・

「エイファシアさんっ!!」

リスティーナの声に我に返った。

見ると、ご主人様が、立ち上がっていた!!

《OUTSIDE少女たち》

《SIDE 零夜》

絶望の縁から舞い上がったおれは、ふふふと笑った。

「はははは。ちゃんちゃんらおかしいな？」

「なん・・・だと・・・。」

「その程度でおれを見切ったとは、ちゃんちゃんらおかしいっていつてるんだよ！！」

おれは、おれはスキルを発動する！！

「ディスプレイストリーム絶望の叫び」

「ふんっ！また・・・太陽先師のスキル・・・か・・・きかぬ・・・なにっ!？」

しかしそのスキルはドラゴン見切れなかった！！

「なっなぜだっ!?! たしかにおまえのデータはすべて採種したはず! なのに、なぜっ!?!」

あまりの驚きの言葉がどもりぎみになるドラゴン。

おれはそこにいはる様子もなく正直にいった。

「闘いの途中で進化しないと、だれが決めた？」

「まっまさかったたかいかいの途中にあみだしたっ!?!」

「そのとうりだっ!?!」

やはりおれがそんなことできるとは想像もしなかったらしい。

しかし、これだっておれだから出来たことだ。

おれには職業がふたつある。

ひとつには太陽戦市。もうひとつがやはり同じくらいのレア職業、
スキルメーカースキルメーカー業製作者だ。

「この職業は単体では最弱だ。だが自分の心で、魂で業を想像するスキルことができる特殊能力だけを持つ!!」

「業を自在に創造し、それを想像するだっ!? そんなのは神の領域だぞ!？」

「だったらおれも、神なんだろうよ。」

「貴様っ! 人間の分際でっ! それに実はわたしにはスキルの類は一切きかないのだ!」

「なにっ!？」

それだったら業製作者でも凌駕してしまう。

もうダメなのか・・・?

おれはここで、GAMEOVARなのか!?

《《OUTSIDE零夜》》

《《SIDE少女たち》》

「レイヤ様っ! わたしには祈るしかありません。がんばって!」

《《OUTSIDE少女たち》》

《《SIDE零夜》》

「だったら、こんなのはどうだ？」

絶望の縁から舞い上がったおれは、残像を作り出した。

しかもおれのステータスはふつうのレベルの5000レベル以上！レベルがあがったからもつとだ。

おれが早すぎたため、出来た残像は・・・五万！！

「ふっふん！業はきかないといっただろう！はっ！！」

ドラゴンの両手からいてつくほどの波動がほとばしり、スキルとかを消していく。だが、

「なぜ消えない・・・。」

だがその答えは感嘆だ。

「それはこれが、業ではない、からだ！」

「なにっ！？まさかっ!？」

「そのまさかだっ！おれは純粹に光速で動くことによって残像を発生させているんだよっ！」

あんまり早く動きすぎると必ず残像ができてしまうのはよく知られているところだが、それを五万にできるのはやはりおれの力と業があつてこそだった。

しかも、

「ふっふん！しかしただの残像ごときはめくらまし・・・なっなにっ！」

ドラゴンが驚いた声あげるのも当然だった。

ドラゴンが残像にやられたのだった。

「わるいな。その残像は、実態をもってるんだ」

そう、この残像はまったくのおれのオリジナルであり、なんと質

量をもっているのだ！

こんなのはどんなロボットアニメを見ても出て来ない独創的な発送だろう。

「堪能したか？これがおれの、業スキル外スキルではない業、クオリティ・アワード・ウイッチタダチユー『質量のある残像』」

「！！」

「クオリティ・アワード・ウイッチタダチユー『質量のある残像』……！？」

ダークネスが旋律する。

このままおしきれるか、そうみんながおもったそのとき、

「ならば……おれも……みせてやろう……。わたしの……
とつときと……いやつをな……」

ダークネスに突然闇がそこに集まり、ダークネスは闇色の発酵を始める。

《OUTSIDE 零夜》

《SIDE 少女たち》

「あつあれはっ！？」

それを見て突然わたしが大声をあげました。

「識しっているの？」

「はっはい！あれはダークネスオブシャドウドラゴンの必殺技、オールレンジフルファイアアタックです！！これは・・・まずいかもしれません。」

「そっそんな・・・。ご主人様・・・っ！」

エイファシアさんが両手を前で組んで乙女の祈りのポーズをする。

乙女の祈りをしていたエイファシアさんが突然大声をあげた。

「あっそれにしてもあなたはなぜそんな知識をっ！？ダークネスシヤドウドラゴンの情報はSSランク扱いのはずよっ！？」

「わっわたしにはS級の諜報術スキルがありますからっ！」

「だったらしょうがないわっ！」

エイファシアさんは乙女の祈りのポーズに戻った。

《OUTSIDE少女たち》

《SIDE零夜》

おれのまわり中にダークネスオブシャドウドラゴンが飛び回り、まわり中から攻撃をしかけてくる。

「四方からの攻撃っ！？」

「ふふっ・・・。あまいな・・・。さすが人間・・・あまい・・・。」

その言葉に真意を悟った。

「これは・・・四方じゃない！八方、十六方、三十二方・・・まだ増える！！六十四、百二十八、二百六十六、五百四十二・・・約千、約二千、約四千、約八千・・・約10万だと！！」

大すぎて計算が追いつかない！！おれは悲鳴をあげた。

「そう・・・あまりに早い速度でくりだす、約10万方向からの、
スーパールレンジ フルファイヤ アタック
超全方位全力全開攻撃！！これがわが・・・埼京の一撃だ！！」
「くっ!?!」

おれの残像は五万。

10万には全然足りない。

いくら実態があるとはいっても、たったの五万の残像で10万の
攻撃を防ぐなどということは、一体につきふたつの攻撃を防がなく
てはならない計算となってしまうので無理だ。

そんな無理難題、人間に手足がふたつずつあったりしなければ、
とても不可能だ。

「遠慮なくいくぞ！！超全方位全力全開攻撃！！」
スーパールレンジ フルファイヤ アタック
「くっ!?!」

10万方向すべてから攻撃がくる。

防げるとはおもえないがやるしかない！！

「うおおおお！！」

おれは防ぎ初めた。

《《OUTSIDE 零夜》》

《《SIDE 少女たち》》

ご主人様たちは、恐ろしい早さで銭湯に入りました。

シユンシユン！ヒユツ！ドガガガガガ！バシユツ！ガイ
ンガイン！ズガツ！キユインキユインキユイン！シャツシャツ
！斬ツ！ビユーン！バシユン！ジュツ！ドガバキグシャー！ズ
ドドドドン！鬱ツ！バキツバキツバキツ！ヒューンガチャー
ンドゴーン！ウイイイイン！どどんっ！ピーッピーッピーッ！
！キラツ シュバババーン！ダダダダッ！破ッ！ゴウツ！チ
ユインチュイン！シユウインシユウイン！フワツ！キツ！ババン
！チュン！バツガン！！

音を訊いているだけで、そのすごさが伝わってくる、そんな戦闘
でした。

そんな禿しい戦闘を、わたしたちは見ていることしかできません
でした。

「ああっ!？」

となりのリステイーナが胃痛な声をあげました。
すると戦いがおわりレイヤ様が血を拭いて倒れたのです。

わたしはピントきてしまいました。

「まっまさかあなたっあれが見えていたのっ？」

「はっはいっ！」

「そっそんなっ実力的にはSS級くらいのわたしですら見えなかつ
たのにどうしてっ！」

「わっわたしの動体視力強化術はS級ですからっ！」

「だったら見えてて当然ねっ！」

「それでっどうしたのっ!？」

「レイヤ様が……。」

「ご主人様がつ!?」
リステイーナは今にも鳴きそうだった。

「レイヤ様は卑劣にも相手が放ってきた10万の攻撃のうち5万をなんとかかしのぐことが成功しました。けれど残されたたくさんの攻撃は絶対不可避の5万の攻撃。ふつうであればここで終わるところをレイヤ様は気合と今生を使って4万9999まで裂け切りしましたが、最後の一発は見失ってしまったのです!」

「そっそんなつ!」

「そしてそれに気を取られるあまり、レイヤ様は残像の操作をミスって同士撃ちになってあんなに傷ついて……。」

「えっじゃあ最後の一発は?!」

「行方不明のままですつ!」

「行方不明ならしかたないわねつ!」

《《OUTSIDE少女たち》》

《《SIDE零夜》》

「がつがはつ!」

「スーパーステールレンジフルファイヤアタック超全方位全力全開攻撃」をやられて、おれはもうぼろぼろだった。

手足は動かそうとおもわないと動かないし、魔法や業なしでは空を自由に飛ぶこともできないだろう。

だがっ!!! だがっしかしっ!!!

おれは、あきらめてなんかいなかったことが明らかになるっ！！

「お前はもう死ぬなwwつきもし超全方位全力全開攻撃スーパールレンジフルファイヤアタックやったらお前はもう死ぬwwww」

ダークネスオブシャドウ何とかが、勝ち誇った恵美を見せるのを、おれはかるうじてゆるした。

だが、それ以上は許さなかった。

「やってみるよ。」

「なにっ!？」

「いいから、スーパールレンジフルファイヤアタック『超全方位全力全開攻撃』やってみるっていつてるんだこのタコ野郎!!」

おれの陰幕にダークネスオブシャドウは当然びっくり仰天した。

「よいのか?! 貴様っ?! 死がこわくないのかっ!?! いままでわしにハム買ってきたやつらは、みんなみんな命があぶなくなるとママンママンと泣き叫び、みっともなく泣き叫んで命乞いした。おまえは、おまえはやつらとはどこがちがうというのかっ!?!」

「いいから、さっさと・・・やれっていつてるんだよこのタコ野郎!!」

おれはそれはただの挑発ではなかった。

おれは、おれはもう見切ったのだ。

実はおれは・・・もう勝っていたのだ。

それを識しらないダークネスオブシャドウオクトパスが、やる!

「しっ死んでもわしはしらんからな!!」スーパールレンジフルファイヤアタック『超全方位全力全開攻撃』

「!!」

だが、それは・・・無効!!

「なっなにっ!」

おれは、たったひとつの残像すら使わずに、完全に、受け止めていた。

びっくり仰天するくずなダークネス邪道オクトパスに、おれはいっ。

「おまえの、『スーパージェットレンジフルファイヤアタック超全方位全力全開攻撃』。たしかに、すごく強くみえるっ。しかしそれはただ、一本の腕が早く動いているだけだっ。つまり・・・。」

びしっとダークネスオブシャドウドラゴンを指差した。

「最初の一撃をとめてしまえば、あとの99万9999初の攻撃は・・・こない!!」

「なっなにっ!まさか貴様っ!たったあれだけのっ、攻防でっ、わが奥義の弱点をっ、見破ったとっ、いうのかっ・・・!!」

びっくり仰天なのはダークネスオブシャドウドラゴンだ。

人間のような知能では絶対に見破れない業だったのに、それをおれが三秒もかからずに見破ってしまったのだから悔しいのだった。

たしかにそれは功名にかくされたトリックだった。
世界に目を向ければ九発の斬撃を同時にやっちゃん業とか1秒に
100発なぐつちゃん業とかいろいろあるが、こんなコロンブス以
上の発見方法で打ち破ったのはおれ発である。

そして、もうそれ破った以上、こいつに要はない。

「さて……。そろそろ、おわりに、しようか……。」

おれは……。最初っから実はずっと鞘から抜いていなかった剣を、
抜いたっ！！

《OUTSIDE 零夜》

《SIDE 回想》

ある日の暮れ方、おれが雨宿りしてるときである。

おれは急に悟った。

「やっぱり、敵が弱くったって、本気でかかってきてるなら、最初
っから全力でやらなくちゃいけない。そうできないのは……。くず
だっ！！」

《OUTSIDE 回想》

《再度零夜》

「そついう……ことか……。」
おれはぼとりとつぶやいた。

おれから急にわきあがった『力』に、ダークネスオブシャドウド
ラゴンがあとじさる。

「なつなんだこの迫力は……。」

「これが、おれの本気だつてことだよっ！」

おれは、とうとう隠されていたおれの本気の力を介抱する。

「行くぜ！！ゾアントロピ―無限増大！！」

あまりの力に、世界が塗り買えられる！

「きゃっきゃあっ！すごい力ですっ！」

「こっこれがレイヤ様の全力っ！？」

うしろで女どももさわいでいた。

「こっこんなつ！みとめないっ！みとめないぞっ！こんな馬鹿なこ
とがっ！わたしにはっ！」

あまり内容の内容なことをいつている往生際の悪いドラゴンに、
おれはゆった。

「しってるか？世界には、ゾアントロピーってもんがある」「
「なにつゾアントロピーだどっ！？そんなものを識しってるのか？！」「
「ああ。もちろんだ……。」

ゾアントロピーは素粒子力学や一般論的相対性理論とおなじく、
世界の源を決める最戦端科学だ。

もちろんこんな田舎の次元の生命体が織しっているはずはない。
おれはしかたなく説明する。

「いいか？ゾアントロピーとは熱力学におけるもつとも起訴的な概
念のひとつであり、それは常に増台し続けるといふ性質を持つてい
ると呼ばれている！そしてけっして減ることはない！だからそれは、
ほとんど運命そのものなのだ！」

頭の悪い読者のためには、もつとわかりやすい例を出す。
きれいな部屋がある。

でもそれは三日たつと汚れて散らかってしまった。

もつといおう。

最初主人公は武器はぬののふくとたびびとのふくしか持たずに旅
に出る。

でもだんだん増えていく。

各師団ジョンに行くともつと増える。

これは自然の節理。

それはどうやっても避けられないことで、ゆえに運命ディステイニーとのちに呼
ばれることになる。

それがゾアントロピーなのだ！！

「だが、ゾアントロピーがなんだというのだ！そんなもの、ただ知識をひけらかし、自分が頭がよいことを自慢してわたしに童謡を誘おうという考えなのではないかっ?!」

「違うな。生命のゾアントロピーが大きくなりすぎていきつく先。それがなにか想像がつかないか？」

「まつまさか……。」

「そう、死、だよ。」

「おれは非常にも告げた。」

「そして、おれの必殺技『ブライト・シャイニング・ダークネス拳』はもう発動している……。」

「あっそういえばっ！」

そこで、ダークネスオブシャドードラゴンが苦しそうにした。

もはや、ダークネスオブシャドウドラゴンは虫の域だ。

だから、ダークネスオブシャドウドラゴンに、おれは勝ち誇ってゆった。

「築いたようだな。だが業はもう発動している。ゆえに、もう遅い。」

「なっなんだと？」

ダークネスオブシャドウドラゴンは驚いたが、もう遅かった。

「必殺技は、なんで必殺技とゆうか織しってるか？それは技が発動したら最期、近くににいるやつらは断末摩すら揚げられず必ず死ぬからだ！」

「そっそんな……。まさか……。このわしが……。ギャアアアアア！」

「つまらないな……。」

あまりにあっけないあん黒龍の最後だった。

倒れた黒竜を見下して、おれは舌打ちをついた。

「だからこの業を使うのはイヤだんだ……。」

おれが臨んでいるのは強敵との闘バトルいだ。

だからこの業を使えば簡単に勝てるにもかかわらず使わなかった。

だが、相手が本気なのにこちらが本気をださないとかくずだ。

だから本気を出してこの業をつかった。

そういうことだった……。

「チツ。だがこれが運命なんだ……。」

そしておれは仲間のところへ帰ろうとしてびっくり仰天した！

「リステイナー！？エイファシア！？」

仲間たちがふたりとも息をせず倒れてまるで死んでいるようだったのだ！！

「まっまさかつ！ダークネスオブシャドウドラゴンの攻撃をつけてっ！？」

おれは真相を織しってしまった。

おれは大丈夫だったが、ふつうの人間にはダークネスオブシャドウドラゴンの強さは強すぎたのだ。

おれは自分が勝つことばかり考えてダークネスオブシャドウドラゴンの攻撃からかばうのを忘れていた。

その結果が、ごらんのありさまだ……。

もっと速くおれがまわりの生き物全部を殺せる『ブライト・シャイニング・ダークネス拳』を放っていたら、彼女たちは死ななくて澄んだかもしれないのに……。

「だがっ！おれはあきらめないっ！おれは今度こそ、この手にこぼれた命を拾い集めたりしないっ！必ずっ！絶対っ！ぜいいん助けるっ！……！」

おれは決意を荒谷して解決策を探して、

「あっそうだっ！」

おれは超SSS+級レアアイテム、『復活の真珠』を出した。

これがあれば助かれる！

だが、問題があった。

『復活の真珠』は一個だけ。

なのに、仲間はふたりいる……っ！！

「いやっ！おれはあきらめないっ！おれは今度こそ、この手にこぼれた命を拾い集めたりしないっ！必ずっ！絶対っ！ぜいいん助けるっ！……！」

おれは決意を荒谷して解決策を探して、

「そうか、このアイテム高価をもとに、あたらしいスキルを創造すれば……！！！」
クリエイター

アイテムと同じスキルを創造するなんて凡人の発想できないことだ。

だが、おれはやった。

『復活の真珠』を自分に私用して、その効果を、コピーする！！

「おおおおお！新報殺・創造！！」
ニユースキル クリエイター

おれの全身をひつかかれるような痛みがおそう。凡人なら三秒で発狂してしまうほどの激しい激痛だった。

いわゆる生みの苦しみだ。

だがおれは絶えた。

しかし……。

「これじゃ……効果が、足りない！！ならっ！！」

おれはそこで、『三倍効果』トリプルブラスターを使う。

これは太陽戦子のレアスキルで、消費アイテムの使用回数を二回増やす便利業だ。

それでさらに二回自分に『復活の真珠』をつかって、完全に『復活の真珠』の効果をものにした。

「復活、しろー！！！」

おれが世界初の復活業スキルでふたりを復活させると目を冷ました。

「あっあれっここはっ！？」

「わたしはいったい何でっ！？」

混乱するふたりに状況を説明する。

「つまりわたしは、ダークネスオブシャドウドラゴンの卑劣な攻撃のエジキになっただんですね……。」

「ご主人様の足手まといにはなりたくなかったのに……。」

自分たちが役立たずだと錯角してふたりは肩を並べて肩を落とすがそれを元気づける。

「いいや。ふたりは美人だしかわいいよ。おれが保証するよ。」

「れっレイヤ様っ！」

「ああっご主人様っ！」

ふたりがとびついてくる。

おれもふたりをだきしめたかったが、おれにはそのまえにやるこ
とがあつた。

「ちよつと、まっててくれ。」

振り返つたは、倒れたダークネスオブシャドウドラゴンだ。

こいつはたしかに悪だったが、そんなに悪い悪ではなかったかもしれない。

自分を殺そうとしたやつに何をあまいことをとおもつかもしれないがこれはおれの感だった。

だがおれの感はたまによく当たる。

「なつなにをなさるおつもりですかっレイヤ様っ!？」

「あつあぶないわよっ!にげてーっ!？」

さけぶふたりを無視して、おれはダークネスオブシャドウドラゴンに復活の業をつかった。

すると、いきなり目の前にすごい線香があがる。

そして長い長い閃光がおわったとき、そこには、なんと……。

「き、きみは……?」

小さな黒い羽根をはやした、はだかの幼い幼女が立っていた。

一番びっくり仰天したのはエイファシアだった。

「なっなんで女の子がこんなところに？ダークネスオブシャドウドラゴンは？」

その質問には幼い幼女が堪えた。

「わたしが・・・ダークネスオブシャドウドラゴン。」

「えっでもっ！？あんなに大きくてごっかつたのに・・・。」

「あれは・・・飯のすがた・・・。」

「なんだって!？」

驚愕の事実におれたちはびっくり仰天した。

では、この姿こそが真の姿だということか。

あのおそろしいダークネスオブシャドウドラゴンの本体がこんなにかわいい幼女だなんて、どんな小説家やどんな漫画化もまだ一度も書いていない、いや、それどころか想像できないような以外な事実だった。

さらに・・・。

(・・・びとっ!)

「ちよっ!」

「なっなっ!？」

女性人の驚きも無視してはだかのままダークネスオブシャドウドラゴンがくつついてくる。

ダークネスオブシャドウドラゴンはすっかりおれになっついてしまったようだ。

「あなたは・・・つよいおす。わたし・・・したがう・・・。」

おれはべつにぜんぜん下心とかなかったのだが、どうやらおれが
ダークネスオブシャドウドラゴンを倒してしまったせいで動物の本
能のせいでそういう風になってしまったっばい。

しかも、おれが洞窟を出ようとしてもついでこようとす。

「なあ。きみはおれについてくるつもりなのか？」

「・・・いく。つよいおす・・・ついてく。」

「参ったな・・・。」

おれとしても、こんなになつてしまったかわいい幼女を殺すの
はしのびない。

でもこいつはすごく人間を苦しめている悪いやつだから退児を頼
まれたわけだし、あ、でも回心させて連れて帰っても退児させたこ
とになるだろうか。

おれは非情に悩んだ。

リステイーナとエイファシアはどうだろうか・・・。

おれがふたりに目をやると、ふたりも同じ気持ちのようだった。

・・・まあ、リステイーナはちよつと踏まんそうだが。

「・・・これ以上人間をおそつたりしないと約束できるか？」

おれがゆうつと、

「・・・する。・・・もともと、じぶんから人間、おそつたり、し
ない・・・。」

「えっ?!でも王様はドラゴンから責めてきたって・・・。」

「それは、うそ・・・。わたし、生まれてからずっと・・・巣穴か
ら、でてない・・・。」

「なんだって!？」

おれたちはびっくり仰天した。

だとするとおれたちは王様にだまされたことになる。

「チキシヨウツ！！まんまとだまされたっ！！」

最初から話がつますぎるとおもったんだ。

やっぱり焼土下座だけで人を信用したおれが馬鹿だったんだ！！

おれの怒りを感じたのか、リステイーナが話をそらすようなナイ
スな提案をした。

「あの、この子の名前を決めちゃわないですか？いつまでもダーク
ネスオブシャドウドラゴンじゃ、不便ですし……。」

「たしかに……。」

ダークネスオブシャドウドラゴンといちいち読んでいたら疲れる
し、ダークネスオブシャドウドラゴンだってうんざりしてしまうだ
ろう。

何かいい名前がないか考えて……。

「『Urea』」

おれの頭に、天啓のようにあるひとつの単語が浮かんだ。

「ゆ……りあ？」

ダークネスオブシャドウドラゴンが首をかしげる。

「ああ。なんか、きみを見ていて急におもいだしたんだ……。た
ぶん、化学かなにかでてきた単語だとおもうんだが……。」

「ユリア、いえ、ユーリア、でしたっけ？きれいな、言葉、ですね。」

「さすがご主人様ですっ！！」

「よせよっ。あたいまえのことをしただけだ……。」
リステイーナたちがおれをほめるのですこし照れた。

「ユーリア、いい……。なまえ。」
ダークネスオブシャドウドラゴン、いや、ユーリアも気に入って
くれたみたいで何よりだ。

「それじゃ、帰るか。王様にききたいこともあるしな。」

「ついていく……。ごしゅじんさま……。」
ユーリアがおれをそう読んで、

「だつだめよっ！ご主人様をご主人様つて読んでいいのはわたしだ
けなんだからっ！！」

エイファシアの猛攻技を受けた。

おれは困ってしまったが、ユーリアは妹みたいなのですぐに思い
ついた。

「じゃあ、これからはおれのことをおにいちゃんつて余分だ。」
するとユーリアは素直な妹みたいになつてくれた。

「わかった……。これから口からクソをたれる前と後に、おにい
ちゃんつてつける……。」

「こつこらっ！女の子がそんなはしたない言葉つかうんじゃねえ！
」！

「そう……。よく……。わからない……。」

こつしておれの仲間にくわつたダークネスオブシャドウドラゴ
ンの化身にして最強のダークネスオブシャドウドラゴンのユーリア。

やれやれ、また面倒なやつが増えちまつたぜ！！

《SIDEなぞの人物》

だが、そんなころ・・・。

深夜。目の冷めるような新月の明かりを浴びて、ひとつの悪だくみが振興していた。

「グへへへへ」

月光すらも届かない真闇の中に、ふてぶてしく邪悪なる笑い声が響く。

そこにいるのはその邪悪ななぞの人物だけではないのだった。

「アッアン、キモチイイ！ たまんない！！」

男にしだなれかかるように、複数の女が男にもたれかかっていた。

彼の下半身からは汚くてみずばらしくてでっかり職種が生えていて、それが動く旅に女が強請をあげる。

「そつそんな・・・かつ堪忍してー！！」

しかしよく見るとその美人なら絶対いわないような下品な台詞をいった女は実はそんな大した美人でえはなく、町を歩けばたまにたくさん見つかる程度の女だった。

そこにいる一番美人の女も整形してるみたいな顔で、深夜のお色気な番組みくらいにしか出る価値がないレベルの女に過ぎない。

「らつらめー！！ とんじやうー！！」

そうさげぶ声もあまりきれいではなく、化粧したガマガエルくらいのかわいさの声だった。

やっぱり本当にきれいな人は零夜のようなすごい人のところにし

かかないのかもしれない。

そこに、変な兜と全身鎧をつけた『オルキルマギヤウ惨殺の白猫將軍』があらわれた。

彼女の正体は、『オルキルマギヤウ惨殺の白猫將軍』。ふたりめのなぞの人物である。

「宰相隔靴。かつて奴隷商人に身をやつしていた闇の魔法使いヘルマンからお手まみをあずかって参りました。」
そういつて一目見るだけで邪悪な手紙をわたす。

「ふん！ヘルマンめ！このまえの王女をさらって奴隷にしてひどいことに使う作戦は失敗したが今回はおめおめと作戦を成功させたようだな！しかしこちらでもダークネスオブドラゴンさえたおせれば・
・・。」

「では!?!」

「いいだろう！計略を楽しみにしているぞとつたえろ！」

「はっ！」

性別不明の変な鎧の女は、さっさと出て行った。

残されたなぞの人物はたかだかと公娼をあげる。

「グへへへへ!!これでベニエ国をのつとる計略はもうもらったも同然だ！世界はこの宰相ジャアंकールのものとなってしまふのだ!!グへへへへへ!!」

はたしてこの宰相とよばれたなぞの人物はだれだったのか。宰相の口にした計略とはなんなのか。そして宰相の触手は何本あるのか。そして零夜の大ピンチがここに始まった!!

《OUTSIDEなぞの人物》

《SIDEなぞの人物2》

そとにでた鎧の変な女が外に出てたためいきをついた。

「ふっふう。やっぱりこれをつけていると窮屈ね」

そういつてそのなぞの人物の二人目が全身鎧をぬいだがもしぬいだ
ところを見た人がいたならきつとびっくり仰天してしまったのだろう。

そこには『オールキルマ惨殺の白猫將軍』のすごいひみつが隠されていた！！

！！

はずした全身鎧の下から、ぼろりとこぼれたのは以外すぎる白物

！！

なんと、なんとなんとなんと・・・！！！！

ぼろりとこぼれたのはなんともちろん、まさかの純白の胸パ
ツドだったのだ！！

なんと、『オールキルマ惨殺の白猫將軍』は胸の大きさを気にするに過ぎない
少女だったのだ！！！！

「むね・・・おおきくならないかな・・・？」

そういつて憂痛な表情でしゃべる『オールキルマ惨殺の白猫將軍』の少女。

あつてもまだ『オールキルマ惨殺の白猫將軍』の顔は月明かりとか暗くて見え
なかつたため、その性別とかはわからないのだった。

はたして彼女の正体は何者なのか。その目的とはいったいなんなの
か。そして彼女の胸はちゃんと大きくなるのか。

そのなぞの正体はだれもしらない・・・。

《OUTSIDEなぞの人物2》

《SIDEおまけ》

一方その頃、同じ真夜。

おれのベッドに、ユリーアがもぐりこんでいた。

「なんだか目がさえちやってねむれない・・・おにいちゃんっ」

「そうかしかたないな。じゃあよく寝むれるおまじないしてやるっか?」

「うん・・・して・・・おにいちゃんっ」

「やれやれ」

何才になっても妹ってやつは手がかかるものだ。

おれは可哀い妹をだきしめた。

そして・・・。

「アツアン、キモチイイ・・・!! たまんない・・・おにいちゃ
んっ!!」

「そっそんな・・・かつ堪忍して・・・おにいちゃんっ!!」

「らっらめー!! とんじゃう・・・おにいちゃんっ!!」

「アツアン、こんなのはじめて・・・おにいちゃんっ。。。」

ぐっすり寝むれたそうですwww

《おもしろかった? www》

転生4・vs最強のあん黒龍との対決!! 採集決選!! (後書き)

それはサイド違いだー!!! W W W W W
と思っただひと、何人いる?? W W W

異議は認める。でも藩制はしていない!!...以上!!...!!

てゆーか「なろう」の読者レベル低いなー!!

あんだけいー観想贈れってゆってもおくんないし...ツマンネ!

しばらく交信休むかもねー!!

じゃっ、ばびー!!

by”黒雲の申し子にして闇の超新星”ブラックファントム・ゼロ

その後、『なるつ』で彼の姿を見たものはいない……。

そし永遠

END

です。

ブラックファントム・ゼロでなくてもネット小説で見せ場が終わってエタるのによくあることですし、何よりこの作品は書いているとだんだん頭がおかしくなってきた危険が危ないので、ひとまずここで幕ということにさせて頂きます。

当初、出落ち確定の内輪ネタとして投稿したので、作品コンセプトの説明不足で混乱させてしまった方や、真面目に期待させてしまったご新規の方は申し訳ありません。

これで零夜の物語は終わってしまいましたが、悲しまないで下さい。

例えこの物語が終わっても、零夜はあなたの心の中にいます。

むしろ悪い意味で絶対にいます。

こんな作品を最後まで読んだんだから、いないはずがありません。だからこれはきつと、さよならではないのです。

ここまで読んで下さった方、本当に本当に、お疲れ様でした。

by ”ブラックファントム・ゼロの中の人” ウスバー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4021z/>

零夜の奇妙な転生

2011年12月18日01時47分発行